

---

# 死にたい僕ら

うわの空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死にたい僕ら

### 【Nコード】

N1124T

### 【作者名】

うわの空

### 【あらすじ】

4人の死にたがりの物語。

## はじまりとおわり（前書き）

メンタルヘルス系の小説が苦手な方はご注意ください。

## はじまりとおわり

「殺して」

震える小さな声で、だが確実にそう言った。

「…姉さん」

少年は無表情で、殺してと訴えた女を見つめる。無表情ではあるものの、その眼にはかすかに悲しみが宿っていた。

カーテンの隙間からわずかに夕日が差しているこの薄暗い部屋は、もうどれくらい窓を開けていないだろうか。外から入ってくる風を、人の声を、彼女はひどく怖がった。部屋の中のコもった空気を入れ替えることは自分にはできないのだと、ずいぶん前から少年は理解していた。

ゆつくりと、まるで足音を立てるのを恐れているような足取りで、ベッドの上の彼女のもとへと歩みよる。やせ細った彼女の身体を、それでも綺麗な彼女の顔を、この目に焼き付けるために。彼女は少年の方を見て、ほほ笑んだ。

「ハル、綺麗。好き」

「…姉さんの方が綺麗だよ」

少年の言葉を聞いて、姉さんと呼ばれた女はひどく沈んだ顔をした。少年の本心は、そして想いは、彼女には届かなかった。

『それ』が何を意味するか、少年はきちんと理解していた。『それ』をすることで彼女がどうなるか、自分がどうなるかも。そして、今ならまだ引き返せるということも、間に合うということも。

「殺して」

再び繰り返した彼女の声はひどく小さく、かすれていた。

「もういい、喋らないで」

ベッドの上に横たわる彼女を、少年は強く抱きしめた。少年の首に、枯れ枝のように細い女の腕が絡まる。少年は、左腕に力を入れ

た。

鈍い音。生ぬるい触感。彼女がわずかにうめく声。少年の首に蛇のように巻きついていた腕に一瞬だけ力が入り、直後ふっと抜けた。「好き」

うめくようなその声は、どちらが発したものは分からない。

鋭く光る凶器。滴り落ちる赤い血。そして透明の、

遠野春彦は、春が嫌いだった。春そのものではなくて、春の空気が嫌いだった。新しいことが始まるような、わくわくした春の空気はいつまでたつても好きなれそうにない。この教室は『高校一年生』という響きの所為か、そのわくわくした空気を必要以上に感じる気がする。春彦はそつとため息をついた。

引越したかったかもしれない、と思う。自分はそういうことを気にするタイプではないと思っていたが、少し離れたところでこちらを見ながら、ひそひそ声で話している同じ中学校出身の女子は、さすがに鬱陶しいと思った。気になることがあるなら直接話かけてくればいいじゃないかと内心で憤りつつも、相手がそれをできない理由を、春彦自身理解していた。同級生の口から時折漏れ聞こえる単語。「お姉さん」「刺した」「殺した」。春彦はうんざりした。誰も自分のことを知らない、どこか遠くへ引越したいと思った。

春彦が進学した公立高校は、良くも悪くも普通だった。学力は平均並、かといってスポーツや芸術に力を入れているわけでもない。どこにでもある中程度の公立高校。特別受験勉強しなくても入れるからと、春彦はそこを希望した。少し頑張ればもう2、3ランク上の学校にも行けるだろうと教師からは言われた。だが、どうでもよかった。

同じ中学から何人か、この高校に進学したのは知っていたが、同じクラスになるとまでは思っていなかった。春彦はもう一度ため息をついた。ため息と同時に、チャイムが鳴り響く。

チャイムが鳴ってしばらくすると、担任と名乗る男性教師がやってきた。やせ気味の身体、癖っ毛、眼鏡。小さな声でぼそぼそと話す担任を見ながら、こいつは生徒になめられるだろうなあと思う。自分は、教師に対して反抗するつもりはない。出来る限り波風立て

ずに、無難な高校生活を送りたかった。まあ、同じ中学出身の生徒と同級生になつてしまつた段階で、それはもう無理な話かもしれないが。

担任が、自己紹介しながら自分の名前を黒板に書く。田口良介、と何とか読めたが、ノートならともかく黒板に対してその文字の大きさは小さすぎる。案の定、後ろの席の男子から読めないとブーイングされて、書きなおした。少しサイズアップしたものの、文字が震えている。この担任は大丈夫か、と春彦は内心呆れた。

「君たちは今、名前の順に座っているよね。まずは一人ずつ自己紹介をしよう。今日から皆、1年1組の仲間なんだしね」

お決まりの提案に、うんざりした。春彦は自己紹介も嫌いだった。他人に知ってほしいことなんて、特にない。

生徒たちが順番に立ちあがり、名前や出身校を名乗り、そのあとはそれぞれ部活の事や趣味のことを話した。みんな似たり寄つたりで、特に印象深い話はない。春彦は頼杖について、生徒の自己紹介を必死になつて聞いている担任を観察した。担任はいちいち大きな動作でうんうん頷いているがそれだけで、生徒の自己紹介に特別突っ込もうとはしない。そんな様子を見てみると、こいつは教師には向いてないんじゃないか、とまで思つてしまう。

そんなことを考えていると、隣に座っていた男子がいきなりすごい勢いで立ち上がった。何事かと思つたが、単に彼の自己紹介の番が回ってきただけだった。大きな声で自分について語る隣の男子を、春彦はちらりと見た。ブラウスのボタンは2つ外し、制服を全体的に着崩している。ツンツンで、茶色に染まつた頭。サーフィンでもやっているのかと思わせる、日に焼けた肌の色。チャラそうな男子、というのが彼に対する第一印象だった。だが、彼の自己紹介は面白く、所々で笑いを取っている。こういう自己紹介ができれば、この時間も苦ではないんだらうなあと思つた。

自分の番は、5秒で終わつた。

「遠野晴彦です。∴よろしくお願いします」

これだけ言うと、さっさと着席した。出身校も言いたくなかった。担任は何か言おうと身体をゆらゆらさせたが、すぐに諦めて「じゃ、次ー」と言った。ある意味楽な担任にあたったと思う。

後ろで自己紹介の声が響き始めると、春彦は机に突っ伏した。くだらない時間だ、早く終わればいいのに。そんなことを思っている。と肩をたたかれた。さすがに担任に注意されたのかと思って顔をあげる。しかしそこには担任の姿はなく、こちらを見ている隣の席の男子の姿があった。先ほどうまい自己紹介をした、チャライ男子だ。「お前さ、なんか色々噂あるけどあれって本当？」

ひそひそ声で訊かれ、春彦は辟易した。あの噂について、本人に訊いてくる奴がいるなんて思ってもみなかった。何だこいつ。

∴さあな」

「なんか、お前が人殺しだって噂が流れてるぞ」

「知らないよ。∴好きに言ってくれ」

周囲の生徒にもこの会話が聞こえているらしく、ちらちらとこちらを見てくる視線が鬱陶しい。さっさと受け流そうと、春彦は適当に返事をした。つもりだったが、隣の男子は構わずに続けてくる。

「お前が自殺未遂したつてのも本当か？」

どこまでデリカシーのない奴なんだろう。春彦は呆れた。

「知らないつて」

「なあお前。この後さ、1階の会議室Cに来いよ」

スケジュールすら聞かず、来いと命令口調。先ほどの自己紹介は確かに面白かったが、こいつは軽すぎる。春彦はいらいらした。軽い奴は基本的に嫌いだ。

「今日は用事があるから行けない」

「ちよつとでいいからさ、来いよ」

「なんだよ、部活の勧誘か？」

そう言うと、隣の男子はにんやりした。

「まあ、そんなとこ」



そこまで言うと2人は、担任がこちらを見ているのに気づき、黙った。隣の男子は何事もなかったかのように担任に向かって笑った。なんだこいつ。

高宮瀝レキの第一印象は、まさに最悪だった。

午前中で入学式は終わり、みんな笑顔で下校していく。そんな中、春彦は会議室Cの前まで来ていた。

会議室Cは、一階の一番端に位置していた。周囲に人通りもなく、孤立したような1角に、その教室はあった。春彦は地図を使って会議室Cの場所を調べ、そしてやってきた。しかし、と思う。彼は会議室のドアの前で一人で苦笑した。自分の長所は真面目なところで、短所は真面目すぎるところだと思う。なんであの男子の言うとおり、のこのことここまでやって来たのか。春彦は自分に呆れた。…帰ろう。

ところが踵を返したとたんに背後から、つまり会議室Cからドアの開く音がした。

「あー！！ちよっと待って！！」

高い、しかし聞き取りやすい女の声が響いた。その声に反応して、思わず立ち止まってしまふ。そして、後ろを振り返った。

会議室から顔を出していたのは、新1年生らしい女生徒だった。新1年生らしいというのは、彼女の胸にピンク色の造花が付いているから分かったことだ。あの造花は、入学式のとくに新生入生に配られたものだ。もちろん春彦も持っている。さすがに、今はもう付けていないが。

しかし、その造花を除けば、彼女は1年生には見えなかった。

赤茶色で長い髪の毛、綺麗に施された化粧、それから、すでにこの学校に打ち解けているような彼女の空気。どこからどう見ても、上級生に見えた。先ほどのチャライ男といい、入学式の日から校則違反をしているなんていい度胸だと思う。

「ねえ、レキ！あんたが言ってたシオンって、あの人？」

人違いだ。春彦は少しだけ安堵した。自分は遠野春彦であり、シオンではない。

そう思っていたのに、会議室からもう一つ覗いた顔は、：高宮瀝  
ははつきりと

「あ、そうそう。あれがシオン！」

そう言った。

「：はあ？」

「おーい！とりあえずこつち来いよ！せつかく来たんだから」

と高宮が叫んでいる間に、赤茶色の髪をした女がこちらへ走って  
きていた。捕獲！と言わんばかりにがっしりと腕を掴まれる。

「ね、ね！とりあえず中、入りなよ！！」

困惑している春彦を、女は腕を掴んだままずると引っ張って  
いく。半ば：：というかほぼ強制的に、会議室の中に引きずり込まれ  
た。

「よお、シオン！」

回転椅子にどっかりと座った高宮が、春彦を見て嬉しそうな声を  
出す。そしてとびっきりの笑顔で、こう続けた。

「よつこそ、自殺部へ！！」

会議室には、まさに「使われていない会議室」だった。埃っぽい空気、黄ばんだカーテン、乱雑に積まれた紙やファイル。部屋は小さめで、中央に大きなテーブルが一つ、それからパイプ椅子が4つ、置かれていた。回転椅子は1つだけで、それはもう高宮の特等席と決まっているらしかった。

「ま、適当に座りなよ！」

と、赤茶色の髪の女に言われて、どこに座ろうかと逡巡する。部屋には高宮とこの女以外、もうひとり女生徒がいた。さっきからずっと無言のその子は小柄で線が細く、左目に眼帯をしていた。肩までの黒髪が、この教室のメンバーからは浮いて見える。というか、茶髪の二人の方が本当は校則違反なのだが。結局春彦は、黒髪の女生徒より少し遠い席に座った。それにしても、

「なんだよ、自殺部って」

先ほどから思っていた疑問を、ようやく口にする。黒髪の女の隣に、赤茶色の髪をした女が座った。回転椅子に座っていた高宮が、両足をテーブルに乗せて言う。

「だから、自殺部。死にたいやつらが集まるどころ」

何を言ってるんだろうか、こいつは。言ってる意味は分かるが、理解に苦しむ。

「私たちが作ったのよ、自殺部。いい名前でしょ」

赤茶色の女が頬杖をついてこちらを見ながら言う。まあ、と付け加えるように言う。

「おおっぴらには言えないけど」

なんていう部活だ、と思う。そんな部活がこの世にあるなんて、聞いたことない。高宮が自慢げな顔で、左手を顔の前でぶらぶらさせた。その手には、会議室のカギ。

「俺はさ、ちょっとしたコネでこの会議室のスペアキーを譲り受け

たつてわけ。この会議室Cは、本当は登山部の活動場所だつたつて話だ。まー、登山部は去年潰れたらしいけど。この自殺部はとりあえず、公には存在してないことにしてる。学校からは非公認だし」  
当たり前だ。こんな無茶苦茶な部活が公認されてはたまらない。

「だけど自殺部はこうやって存在してる。で、部員募集中だつたつてわけ。お前さ、死にたがりの部類だろ？」

高宮の決めつけっぷりにカチンとくる。春彦は思わず反論した。

「そうだと言った覚えはないね」

「あんたの元同級生から、色々聞いたんだけどな」

「だからそれは知らないって言ってるだろ」

「人殺したとかなんとか？まあその辺はどうでもいいよ」

高宮は本当にどうでもよさそうな声でそう言った後、持っていた鍵を手首にぐつと押しあてる真似をした。

「でもこれは本当だろ？お前の手首にさ、切った傷跡があるっての」  
「……」

先ほどからこちらには大して興味なさそうだった黒髪の女が、片目でこちらを見てきた。

「それだけで十分。お前は堂々と、ここの部員だつて言える資格があるぜ」

非公認のとんでもない部活のことを、堂々と言えるか。春彦は内心で突っ込む。

「俺たちは3人は全員、死にたがりだ。この2人と俺は、同じ中学出身。ちなみにこっちの二人は、1年3組だ」

高宮のその言葉を聞いて、春彦は改めて部屋の中にいる生徒の顔を見た。派手そうな赤茶色の髪の女、大人しそうな黒髪の女、そして、チャラい高宮。こいつらが全員、死にたがり？とてもじゃないが、そんな風には見えない。

「漚が強引でごめんね。でも結構いいやつよ、これでも」  
と言ったのは、赤茶色の女。

「これでもは余計だ」

「よろしくね、シオン。私は相葉理奈。リタってのがあだ名なんだけど、呼びにくいからそのままリナでいいよ」

高宮の突っ込みを無視して、相葉は自己紹介をした。春彦はこの部屋に入るまで、彼女に掴まれていた腕のことを思い出していた。お前も大概、強引だと思うが。

そう思っていると、先ほどまで一言も発していなかった黒髪の女が声を出した。その声は高くも低くもなく、透き通ったような細かい声だった。

「…坂東優子。…ユウ」

一瞬、「ユウ」は何かと考えて、あだ名のことだと察した。俺はさつきからシオンと呼ばれているし、相葉は自分のあだ名はリタだと言った。そして坂東は、ユウ。多分、これは…

「んでんで、俺が高宮瀝！俺はそのままレキって呼んでちょ」

「…レキソタン、か？」

春彦の問いかけに、高宮も相葉も目を丸くした。坂東は相変わらず暗い目をしていたが。

「なにお前、向精神薬の名前とか知ってんの？」

向精神薬とは、睡眠剤や精神安定剤などの総称である。心療内科や精神科で処方される薬の類だ。春彦はその薬のことを知っていた。「レキソタンはベンゾジアゼピン系の精神安定薬、相葉のリタってのは…リタリンのことかな？ナルコレプシー（眠り病）に用いる薬だ。坂東のは…ユーロジン？」

「違う。ユーパン」

と訂正したのは、坂東本人だった。

「ということは俺のはまず間違いなく、催眠鎮静薬のハルシオンからとってるよな」

「アタリ。すげーよお前。自殺部員にふさわしいわ、マジで」

高宮が感嘆したような声を出した。その声を聞いて、春彦は余計な知識を披露してしまったと少し後悔した。

「お前も飲んでるのか？」

「いや…」

膨大な薬を処方されていた、『彼女』のことを思い出す。薄暗い部屋。痩せた身体。彼女の最後の…

「無事に自己紹介も済んだし！明日…つまり土曜にさ、懇親会みたいなのも兼ねてどっか行こうかと思ってるんだけど」

春彦を現実世界に呼び戻したのは、高宮のこの言葉だった。

「俺は行かない」

「なんで。なんか用事でもあんのか」

「この部には入部しない」

「はあ？何をいまさらー」

今更も何も、無理やりひっぱつ来たのはそつちだろう。

「とりあえずさ、土曜の懇親会だけでも出るよ。この部活、どうせきちんと活動しないから。集まりたいやつが集まる部活だから、いつ顔出してくれてもいいし休んでくれてもいい。だけどとりあえずさ、最初くらい足並みそろえようぜ」

「だから、入る気ないって…」

「私、遊園地に行きたーい！！」

春彦の否定文をさえぎって、相葉が叫んだ。

「オツケ。んじゃ、みさと遊園地に決定な」

高宮がさつさと目的地を決め、じゃ、今日は解散しようかと言いつつ始めた。

「おい、レキ…」

思わず呼んでしまつて、ギョツとする。高宮は…レキは、笑っていた。よく見ると、相葉も笑っている。坂東は黙ってこちらを見つめていた。

「あたしはリナね。相葉じゃなくて。あと、この子はユウだから」

「んじやなシオン、明日絶対来いよ。10時集合な」

そう言つとレキは、春彦の肩をぼんと叩いて部屋を出て行った。「遅れないでね！」

と言い残し、リナとユウも出て行ってしまった。

面倒なことになった。と、春彦は苦笑した。



ふわふわする足元。ふわふわする世界。何も考えられなくなる頭。それが、一瞬のまやかしだということは、自分自身理解していた。それでも、

それでも。…一瞬でもいいから、ここから逃げ出したいんだ。

昔の俺には、その意味がよくわからなかった。一瞬だけ逃げてどうするのか。どうせまたすぐに、現実には悲しい音を立ててやってくるっていうのに。こんなことしたって、どうせ現実からは逃げられない。だったら、立ち向かう方がよっぽど堅実で、かっこいい生き方じゃないか。

「逃げるんじゃないよ」

あの時彼がどういう気持ちでこれを聞いたのか、今となってはもう分からない。きつと一生分からない。だって俺は、あいつじゃないから。今俺が「これ」をしている理由と、あの時あいつが「あれ」をしていた理由は、似ているようできつと違うんだ。

白い錠剤、青いカプセル、ピンク色の錠剤。目の前にある薬を眺めて、それから一気に飲み下す。水なんていらぬ。大量の薬を飲むことにはもう慣れてしまったから。

次第に、ふわふわと浮いてくる床。自分の足。眠くなる頭。何も感じなくなる心。

今の自分はまさに「逃げている」。それは知っている。だけど今、現実と真正面から戦う力なんて持っていなかった。向かい合ったら、ばらばらに壊れるかもしれない。

そう、これは。逃避でもあり、防御でもあるんだ。

遅れるなど言った本人が遅れるとは、一体どうということなんだろうか。

春彦は、みさと遊園地の前でため息をついた。みさと遊園地は春彦が通っている学校からはさほど遠くない位置にある、中型の遊園地だった。小さな動物園も併設しており、毎日イルカショーを見られるというのが、この遊園地のウリだった。

何回か来たことのある場所だったので、迷うことなくすんなりと来れた。春彦が到着した段階で、10時10分前。誰もいないだろうと思っていたが、すでに一人門の前に立っているのが見えた。

「あ、えつと…ユウ」

一番乗りはユウ。小柄な彼女は、遠くから見ると小学生のように見えた。上は黒のタートルネックに灰色のパーカー、下はジーンズというラフな格好。改めて見ると、彼女は本当に細かった。華奢を通り越してるんじゃないかと思う。

ユウと呼ばれて、彼女は一瞬こちらを見た。それからぼそりと呟いた。

「リナとレキ、遅れるって」

10時に来いよ！とか遅れないでね！と言っていた二人が見事に遅刻である。春彦は呆れた。そして困った。この無口な女の子と二人で、どうやって時間を潰せと言うのか。春彦は家から持ってきた飴を探すために、ポケットに手を突っ込んだ。

「…飴食べる？」

「いらない」

そんなにあっさり断られてしまうと、余計に気まずい。とりあえずしばらく、沈黙で過ごすことにする。春彦は一人で飴を舐め始めると携帯を取り出し、適当にいじるふりをした。

遊園地の中から子供の笑い声や、乗り物の走る音が響いている。そんな中で沈黙しているのは、明らかに変だった。

「真面目なんだな」

「え？」

ユウがいきなり話したので、内心どきりとした。

「来ないと思ってたのに」

ユウは相変わらずこちらを見ようとせず、真正面を向いたまま無表情だった。春彦はユウの方を見た。視線がかなり下向きになる。本当に小さいなあ、と思う。

「まあ、暇だったしね」

「それでも、嫌なやつは来ない」

それもそうだと思う。会議室の時といい、俺は何をのこのこ顔を出してるんだろうかと自分でも不思議に思う。

「なんていうか、空気みたいなのがあるんだ。惹かれるような」

ユウが、ぼつりと言った。

「え？」

「死にたがり同士、惹かれあうものがある」

ユウは片目で、春彦を睨むように見た。その眼は、まるで底なしのように暗い。

「ごめえん！！寝坊しちゃったー！！」

ユウに睨まれ、春彦が返答に困っていたところに、この素っ頓狂な声が飛んできた。振り返らなくてもこの声の主が誰なのかは分かるが、一応振り返る。春彦が振り返ると同時に、ユウがその名前を呟いた。

「リナ」

寝坊しちゃったというリナは、その割に化粧も服のコーディネートもばっちりだった。寝坊しても、そこだけはしっかりやってきたのだろう。ピンク色でフワフワした生地の子供用チュニック。春物らしい飾りのついた茶色のブーツ。全体的に黒くてシンプルな感じのするユウ

ウとは対照的な服装だった。

「あれ、レキは？」

「遅刻」

「はあ！？言い出しつぺのくせに何してんのあいつー」

お前も遅れて来ただろ、と春彦は内心で突っ込む。声に出すのは面倒だった。リナは少しだけ乱れた髪をとかしながら言った。

「どーせ、ODでもしてオチちゃってるんじゃないの」

OD。つまり薬物の多量服薬。場合によっては死に至る。春彦の頭の中から、そんなデータが引き出された。

「それ、大丈夫なのか？」

思わずリナに問いかけた。リナは一瞬目を丸めてから、ああ、という顔をして笑った。

「大丈夫大丈夫！ODっていつでもプチだし、あいつ、薬にはもうかなり耐性あるしねー」。

多分、ある程度飲んでもしばらく眠りこけるだけよ。いつもそうだもん」

「だけど万が一、があるだろう」

ODによる死亡率はかなり低い。しかしそれでも、万が一がある。

「だから私たちも止めたいんだけどね」

リナが、どことなく悲しそうな顔で笑った。それを見て、春彦は何も言えなくなつた。やはりレキも死にたいと思っっているんだろうか。「俺たち全員死にたがりだ」と言つたレキの声が、頭をかすめた。

彼は死ぬために、薬を飲んでるのだろうか。彼もやはり、何かを抱えているのだろうか。春彦はレキの安否が気になっていた。しかし、

「わっりー！！マジでごめん！！」

20分遅れでやってきたレキは、元気そのものだった。春彦は拍子抜けと安堵を同時に感じた。

「ちよつとー！レディを待たすなんてどういうことよー！！」

「うっせーな。どうせリナだって遅刻したんだろ？」

「はあ！？なんでそういうことになるわけ！どこにそんな証拠があるのよ」

「遅刻したね」

ナイスタイミングでユウが呟く。

「ほら見る。やっぱりお前も遅刻してんじやねーか、この遅刻魔！」

「失礼ね、あんたに言われたくないわよ！」

レキとリナの言い争いがヒートアップしていく。その様子を、冷めた目で見続けるユウに、春彦はそつと尋ねた。

「…あの二人は、いつもあんな感じなのか？」

「ああ。あれでも仲がいい」

「仲がいい…な」

説得力があるんだかないんだかよく分からない2人の様子を見ながら、春彦はため息をついた。

遊園地に入場してから本領を發揮したのはリナとユウだった。彼女たちは次々と自分たちの乗りたい乗り物を指名し、乗っていった。特に絶叫マシンが好きらしい。春彦は好きでも嫌いでもなかったが、次第にレキの顔が曇り始めた。

「レキ、大丈夫か」

春彦は思わず、隣を歩くレキに声をかけた。

「ちよつと酔った…」

と、気持ち悪そうにレキは答える。

「俺も疲れた。ちよつと休もう」

まだまだ元気なりナとユウに、「俺たちちよつと休憩するから」と声をかける。さすがに心配そうにした彼女たちに、しばらく休めば大丈夫だから2人で適当に園内を回ってきてくれと言ったのはレキの方だった。

近くに売店があったので、そこで飲み物を買って、近くのベンチに腰掛けた。仲良く歩く女子二人を見ながら、春彦は呟いた。

「仲いいな、あの二人…。しかもなんか姉妹みたいだ」

リナとユウの身長差を見ていると、本当の姉妹のようにも見える。それを聞いたレキは笑った。

「だとしたら、ユウの方が姉だな」

「え？」

どう見たって、背の高いリナの方が姉だろう。活発な姉と、大人しい妹。という構図の方があっている気がする。

「分かんねえ？ああ見えて、頼ってるのはリナの方だ。リナがユウに頼ってる」

「そうか…？」

「まあパツと見じゃわかんねえよな。…死にたがりも、見ただけじ

「や分かんねえし」

レキは、はしゃいでいるリナを見ながら言った。

「…お前も、死にたがりには見えない」

春彦はレキの方を見ながら声のトーンを落としていった。死にたがりと言葉は、遊園地では必要以上に浮いているように聞こえる。目の前を笑いながら走りぬけていく子供を見ながら、レキは笑って言った。

「死にたいんですーって名札を付けてる奴なんていないからな」

そう言い終わると黙りこんだ。長いような短いような沈黙。春彦は遠くの方を走っているジェットコースターを見ながらコーラを飲んだ。笑い声と、明るいBGMの響く園内。それはまるで非現実だった。本来なら、「死にたがり」と言う単語の方が現実的はずなのに、それすら浮いて聞こえるくらい、この場所では非現実の空気が普通の空気だった。

「お前さ、本当に人を殺したのか」

レキの声に、春彦は思わず睨み返した。しかし予想とは違い、レキは笑っていないかった。真剣で、どこか悲しそうな顔。レキの目は、目の前ではしゃぐ子供たちを見ていた。しかし見ていなかった。レキの目は、なにも映していないかった。いや、

「俺は友達を殺した」

レキの目は過去を見ていた。もう2度と戻れない、過去を。

「俺があいつを殺したんだよ」

レキの声が、春彦をその過去と連れて行った。



レキには気の弱い、しかし優しい幼馴染がいた。他の男子と比べても背の低かったその幼馴染は、勉強もスポーツも得意ではなかった。社交性にも乏しく、内向的。ただ、絵を描くのが好きだった。彼は中学では美術部に入り、いつも油絵を描いていた。美術室で真剣に油絵を描いているその後ろ姿を、レキは今でも鮮明に覚えている。

その幼馴染とは対照的に、レキは活発でけんかつ早い性格だった。バスケット部に所属するものの幽霊部員で、放課後には他校の男子生徒と殴り合いのけんかをすることも多かった。

当時のレキにとって、人間はひどく鬱陶しい生き物だった。ただ、その幼馴染とは仲が良かった。唯一、まともに会話する人間だったかもしれない。

「良哉、まだ描いてたのかよ。もう下校時刻とつくに過ぎてんぞ」

レキは、絵を描く幼馴染の、良哉の姿を見るのが好きだった。

「あ、レキ君」

「いい加減その君付けやめろよ。レキでいいよ」

「でも…こっちの方が慣れてるから。…また喧嘩したの？」

レキの腫れた右頬を見ながら、良哉が心配そうに言った。

「ああ、でも安心しろ。俺の勝ちだぜ。へへ」

「もう、あんまり喧嘩しちやだめだよ」

良哉はナヨナヨした口調で言ったので、俺は思わず笑ってしまった。俺と良哉がつるんでいるのは、他の生徒から見ても不思議そうだった。

中学2年の時、俺たちは別々のクラスになった。そして良哉は、いじめられ始めた。良哉が上級生に殴られているのを発見し、俺が止めに入ったことも何回かあった。ぼろぼろになっていく制服。鞆。

そして、良哉。俺は良哉を励まし続けたが、良哉が学校を休む日は段々と増えていった。風邪、頭痛、腹痛、法事……。毎日毎日何かを口実に、良哉は学校を休んだ。そしてついに、不登校になった。メルをすれば返事はかえってくるものの、いつまでたっても学校に来そうな気配がないし、意志も感じられない。

俺は許せなかった。良哉をいじめる奴らもだが、それに立ち向かいもしない良哉にも。

その日、レキは学校帰りに良哉の家に立ち寄った。良哉の家はレキの家から少し離れたところにある、立派な一軒家だった。この時間、共働きの良哉の親はいないはずだ。そう考えながら、玄関のチャームを鳴らした。

「…はい」

インターホンから聞こえるか細い声。案の定、良哉だった。

「良哉？俺」

「…レキ？」

「ちょっとだけでも話さないか。玄関先でいいからさ」

少ししてから開いたドアの向こうにいたのは、毛玉だらけのトレーナーにジャージのズボンという、明らかにパジャマ姿の良哉だった。その顔には生気が感じられない。

ドアは半開きのままで、それ以上開けてくれそうにもなかった。よく見たらチェーンまでしている。

外に出られそうならどこかに連れだそうと思っていたが、良哉のそんな様子を見て諦めた。とりあえず、言いたかったことを言うことにする。

「良哉、お前さ、学校に来いよ」

「……………」

「お前がいじめられてて大変なのはわかるけどさ、いつまでも逃げてたってなんにも始まらねえじゃんか。俺も一緒に戦うから、外に出て来いよ」

「……………」

「別に喧嘩しなくてもいいじゃん。悔しいなら、絵でもなんでもいいからあいつらを見返してみろよ」

「……………」

「…なんとか言えよ、良哉」

「僕は、」

良哉の声は、細く、小さかった。

「行けない…」

「だから、こうやってずっと引きこもってたって…」

「分かってる！だけど怖いんだ。僕は、僕は…今は逃げたいんだよ」  
この言葉に、レキは怒りを感じた。良哉でない人間だったらかまわず殴つているところだが、良哉相手では殴る気にはさすがになれない。いらいらしながら、半開きのドアをがっと思んだ。引つ張られたチェーンが、ガチャン！と派手な音を立てた。

「お前ふざけんなよ！いつまでナヲナヲしてるつもりだよ！！」

予想以上の大声に、良哉はきよるきよるした。近所の目を気にしているらしい。だが、俺にとってそんなことはどうでもよかった。

「立ち向かわなきゃなんにも変わんねえだろうが！！お前が学校を休んだって、何一つ進展することはねえぞ！！むしろやつらが面白がるだけだ！なあ、分かってんだろお前だって！！」

「分かってるよ！！」

レキの声につられたのか、良哉の声も少し大きくなった。

「ただどどうしても、今の僕には立ち向かう勇気が持てない！それがどれだけみじめで情けないことが、自分だつてよく分かってるよ！！」

良哉の目には涙がたまっていた。レキは自分の怒りの感情が、冷めた、諦めの感情に変わっていくのを感じていた。こいつには何を言っただって無駄だ。俺の中の怒りは、すっかり溶けてなくなってしまう。

「…レキ君？」

そんな俺の変化を察したのか、良哉が不安げな声を出した。俺は恐ろしいほど冷めた目で、良哉を見た。身長差の所為もあって、見下すような形になった。

「…もう知らねえよ」

先ほどまでの怒声とは違ってかわり、冷静な声で囁いた。その声を聞いて、良哉は眼を丸くし、それから少しだけ顔をゆがめた。

「もうお前なんか知らねえ。一生家に閉じこもってるよ。一生そうやって逃げてろ」

軽蔑するような眼で、そう言い放ったことを今でも鮮明に覚えている。そしてあの時の、良哉の悲しそうにゆがんだ顔も。

訃報が届いたのはそれから二日後だった。良哉は自室で首を吊った。中学校の、制服を着て。

良哉が死んだ。その意味を理解するのに、どれくらいの時間がかかっただろうか。死んだということは、分かる。ただ、その意味が分からなかった。分からないまま、俺は良哉の通夜に参列した。その時、カナダに留学していた良哉の姉に、声をかけられた。

「あなたが高宮くん？」

「…そうですね、けど」

良哉の姉は、細い目を真っ赤にはらしていた。けれどもレキに向かって、なんとかほほ笑みながら言った。

「良哉とね、国際電話で何度か話してたんだけど、いつもあなたの名前が出てきたわ。良哉はずっとあなたに憧れてた。良哉とお友達でいてくれて…ありがとう」

ありがとう、の声は大きく震えて、やがて嗚咽へと変わった。俺はそんな良哉の姉を見ながら、深い罪悪感に襲われていた。俺は最後に、あいつになんと言ったか。あれがあいつを追い詰めた、最後の引き金だったんじゃないのか。その考えはいつまでも、頭の隅にどす黒いシミを作った。

美術室でそれを発見したのは、良哉が死んでから2週間後のことだった。美術部だった良哉の作品が残っていないかと、探しに行ったのだ。イーゼルに立てかけられていたはずの、描きかけの油絵はなくなっていた。俺は棚をあさって、良哉の過去の作品が一つでも残っていないかと探し続けた。すると、一つだけ出てきた。良哉のサイン入りの作品。それは、

それはとにかく、モノクロだった。

いつもはパステルカラーをふんだんに使って、淡いタッチの絵を描く良哉だが、この絵だけは違った。使われているのは黒と白と灰

色。それだけだった。

中央に大きな黒い穴が開いており、周りの景色はひび割れていた。それを見下すような格好で、人の足だけが書かれていた。それはまるで、首を吊った人が見ている景色のようだった。

その絵を抱え込んだまま、俺は地面へとへたり込んだ。あいつは、あいつはいつから死ぬ気だったんだろうか。この絵を見る限り、少なくとも登校拒否になる前、美術部にはまだ通っていた頃から、そういうことを考え始めていたはずだ。俺は、あいつが学校に来ている間は大丈夫なんだと思っていた。いじめられていても、学校来てるあいつは大丈夫だと。いつものように絵を描いているあいつは大丈夫だと。俺に向かっていつものように微笑むあいつは大丈夫だと。

大丈夫なんかじゃ、なかったんじゃないか。

「逃げたつてよかったんだ……」

もう一度、モノクロの絵を見ながら呟いた。届かないはずの相手に向かって。

「なあ、俺が間違えてた。逃げたつてよかったよ。お前はよく頑張った。だから逃げたつてよかったんだよ。だから、」

モノクロの絵に、透明の雫が落ちる。自分の目から溢れ出ているそれを、レキは止められなかった。

「生きてて、ほしかった」

なんであの時そう言えなかったのか。なんであの時ああ言ってしまったのか。伝えたい相手は、良哉は、帰ってこない。永遠に。

美術室で、油絵を描いていた良哉の後ろ姿を思い出す。声をかける。振り返る。その顔は、笑っていて。

いじめられているのを発見して、上級生を追っ払って、大丈夫かって声をかけた時。俺の方を見上げた顔は、やはり笑っていて。

あいつはいつでも笑顔だったんだ。そう、

俺が最後に会った、あの日以外は。



「俺はな、死にたがりじゃないんだ」

先ほどまで無表情だったレキが、ふつと嗤った。

「俺は逃げたいんだけなんだ。あいつが…良哉がどうだったのかは分からない。もしかしたらあいつは死にたがりだったのかもしれない。でももしかしたら、ただ逃げたかっただけなのかもしれない。家に引きこもるか、薬をたくさん飲むか。方法は違うけど、やりたいいことは一緒だったのかもな」

レキはぼんやりした口調で続ける。

「俺は逃げたいんだよ。良哉の死から。その責任から。俺はあいつを殺した。あいつを殺した直接の原因じゃないんだとしても、追い詰めた人間の一人であるのは確かだ。だから俺は、人殺し」

目の前を歩いていた親子連れが怪訝そうな顔でこちらを振り返った。だが、レキはそれを気にする風でもない。

「お前がどうなのかは分からない」

ぼんやりしていたレキの声が、急にはつきりした。春彦はレキの方を向いた。真っ黒な瞳が、真剣にこちらを見つめる。

「お前がどうなのかは分からない。だけど、リナとユウは間違いない死にたがりだ。それと同時に、生きたがり。…シオン、俺はな。死にたがりを死なせたくないんだよ。もう2度と、あんな思いはごめんなんだ。それが、自殺部を作った本当の理由」

春彦は、何も言えなかった。無言の時間が続く。春彦は色々なことを考えてから

「レキ」

レキの真剣なまなざしをまっすぐ見返しながら、言った。

「俺は死にたがりだ。そして…人殺しでもある」

人殺し、という言葉聞くたびに思い浮かぶ映像。狭くて薄暗い部屋。「殺して」と言う彼女の声。粘度のある赤い液体。そして彼



女の、顔。

春彦の言葉を聞いたレキは、冷静な顔だった。そして確認するようにつくりと言った。

「…俺は人殺しだけど、死にたいとは思ってない。けどお前は…死にたいのか」

いつもふざけていると思っていたレキは、真剣だった。春彦はうなずいた。

「ああ」

「だったら」

レキが、手にしていたドリンクを一口飲んでから、言った。

「俺はお前を止めるよ」

春彦にとって、レキの第2印象は「良いやつ」だった。

しばらくしてからこちらにやってきたリナは、大きなヌイグルミを抱えていた。園内のゲームセンターで取ったらしい。首の長い、羊のようなもこもこの生き物。

「…なんて言うんだっけ、これ」

春彦が呟くと、「アルパカ」とユウが答えた。

「レキどう？薬大分抜けたー？」

「まあな。お前らは何乗って来たんだ？」

「ジェットコースターとバイキングとコーヒーカップと…」

「…いやもういい。聞いただけで酔いそうだ」

レキはさも気分が悪そうに、口に手を当てながら言った。

「レキお前…もしかして遊園地苦手なんじゃないのか」

春彦が訊くと、レキは苦笑した。

「乗り物は正直苦手だな。だけど、遊園地の雰囲気は好きなんだよ。園内を見渡して、付け加えた。」

「フワフワしてる」



最後に観覧車くらい乗って帰ろうということになって、4人全員で観覧車に乗った。特別高くもない観覧車は、それでも景色が良かった。

「そついやシオンはさー、続けるの？部活」

窓の外を見ながら、リナが興味なさそうな声で言う。リナの隣で景色を見ていたユウは、春彦の方を一瞬だけ見て、景色へと視線を戻した。

「…そつだな」

呟く春彦に、レキがいつものようなおどけた口調で言う。

「ま、もし部活に来なかったとしても、俺は勧誘し続けるね」

「うっわー、レキそれストーカー」

「うっせえ」

「俺は…」

レキのリナの声をさえぎって、呟くように言った。

「もうしばらくここにしようかな」

それを聞いたレキとリナは一瞬茫然とした顔をして、それからんまりと笑った。ユウは相変わらず大して興味なさそうに窓の外を見ているが、春彦が発言したその一瞬だけ、春彦の方を向いていた。「そんじゃ、ま。改めまして」

レキが明るい声で続ける。

「ようこそ自殺部へ！！」

レキが両手をあげた反動で、ゴンドラが揺れた。皆で「危ないな」と笑った。

そう、少しだけ。少しだけここにいるのも、悪くないかもしれない。

ひんやりと冷たい刃物が、腕に当たる感覚。少し力を込めて、押し当てる。引く。

皮膚の裂ける感覚。その裂け目から一瞬見える白い肉。その白い肉は血で赤色へと変わり、溢れ出した生温かい血が腕を伝った。

一定のリズムで、腕から滴り落ちる赤い血液。その温かさ。それが、自分の中の大きな穴を一瞬でも埋めてくれる気がする。気がするだけで、実際はちっとも埋まってなんかいないんだって、本当は分かっている。むしろその穴は広がる一方で、私が身体を切る度に悲鳴を上げながら、孤独を吐きだし続けている。

自分の血の温かさでも、人の体温でも埋まらない何か。私はそれを埋める方法をずっと探してる。

寒いのは嫌い。さみしいのも嫌い。誰かにそばにいてほしい。誰でも、いいから。

なのに、人と一緒にいればいるほど孤独感が増す。自分は独りなんじゃないかって…ううん、自分は独りなんだって思ってしまう。こんなにたくさんの方がいるのに、私はずっと独りぼっちだって。それはきつと、昔から。

血が止まらなくなると、孤独もどんどん溢れ出す。その反面、止まらなければいいのにも思う。自分の中の汚いものが、血と一緒にすべて流してしまえばいいのに。

私なんてどうでもいい。どうでもいいんだ。

「痛くないのか？」

痛くないよ。どれだけ切っても、痛みなんて感じないの。後から少しだけ、痛くなるけど。切ってる間は痛みなんて感じないの。

「うそ」

嘘なんかじゃないよ。痛くないの。本当に。

「痛いのはきつと、腕じゃないんだよ」

彼女は私に向かってハンカチを差し出す。真っ白なハンカチ。こんな綺麗なハンカチに、私の汚い血をつけるなんてできない。

ためらっていたら彼女は私の腕を掴んで、傷口の上からぐるぐるとハンカチを巻き始めた。白い布ににじむ赤。ああ、もったいない。

「本当に痛いのは、……」

何言ってるの？そんなことないよ。私は幸せだよ？ただちょっとさみしがりなだけで。

痛くなんてないよ、どこも。この傷も、その傷も。

「だったらなんで、」

だったらなんで、私は泣いているんだろう。

「あつちい〜！！！」

レキがさも暑そうな声を出した。会議室には、冷房がない。ドアを開けた瞬間こちらにやって来るむせ返るような空気を、春彦はもろに浴びた。一気に汗が噴き出たような気がする。

「とりあえず窓開けようぜ、窓！」

と叫びながら、レキが窓へと駆け寄る。錆びたカギに少々手こずってから、窓を全開にした。近くなる蝉の声と、室内に勢いよく入り込む生ぬるい風。その風は乱雑に積み上げられていたプリントに直撃し、プリントの束が床へと崩れ落ちた。何枚かはしばらくひらひらと空中を舞った後、春彦の足もとにまで落ちてきた。

「うっわー！すっげーメンドイことになった！」

レキが面倒くささ丸出しの声で叫んだ。

「…いいんじゃないのか、このまま放っておいて。どうせこのプリント、使わないんだろ」

「…なにお前、会議室が汚いままでもいいのかよ」

「そりゃ嫌だが、拾うのはもつと面倒くさいね。気になるならお前一人で掃除しろよ、レキ。窓を開けたのもお前だろ」

「…」

レキはしばらく、春彦の方を睨んでいた。

「うっわなにこれ！！泥棒でも入ったの!？」

会議室に入ってくるやいなや、リナが叫んだ。床一面に散乱した黄ばんだプリント。窓から入ってくる風がカーテンをバタバタと揺らして、「犯人はここから逃げました」と言わんばかりの演出になっていた。

「風の仕業だつつうの。俺の所為じゃねえし」

「あんたたち、よくこんなきつたない部屋にいられるわね！！ほら、

片づけなよ」

「俺は別にこのままでもいい」  
と開き直るレキ。

「まあ、気になったやつが片づければいいんじゃないのか」  
と春彦。

「信じらんない！」

リナは机の上にドカッと自分のカバンを置くと、しゃがみこんでプリントを拾い始めた。

春彦はドアの方を見た。ユウの姿が見えない。

「ユウは？」

「あれ、言っただけじゃなかった？」

リナがせつせとプリントを集めながら言う。

「ユウは今日、学校に来てないわよ」

「へえ…。珍しいな」

自殺部は春以降、結局毎日のように放課後に集まっていた。バイトをしているレキは休むことも多かったが、ユウと春彦は皆勤だった。リナはたまに「用事があるから」とユウに伝言して、休むことがあった。

リナとレキならともかく、ユウがいないとは珍しい。

「ユウのお母さんの命日か」

レキが思い出したように言った。春彦は驚いて、レキの方を見る。

「ユウの母親、亡くなってんだよ。今は母方のおばあちゃんと一緒に住んでんの」

「そうなのか…」

そのまま、沈黙。リナがプリントを拾い上げる音が、やたらと大きく聞こえる。せつせと集めるリナの後ろ姿を見ていたら、さすがに不憫になってきた。

「手伝うよ」と言っただけ、春彦はしゃがんだ。

「シオンお前！！裏切ったな！！」

「別に。拾いたくなっただけ」

春彦は笑いながら、足元にあるプリントを集めていった。額から汗が落ちて、プリントに染みを作った。今日は本当に暑い。

集め終わったプリントを、リナに手渡した。

「はいはい、残りは私が綺麗に積み直しとくから。どうもありがとう」と言いながら手を伸ばすリナ。手を伸ばしたせいで、長袖ブラウスの袖が少し下に落ちた。

そこから覗いたのは、何本もの茶色い線だった。

「…！」

春彦はその線に見覚えがあった。そうか、リナは…。

「リナ、見えてんぞ」

指摘したのはレキだった。リナは自分の腕を見て、ああ、と苦笑した。

「増えてんじゃねえのか、傷」

「そんなことないわよ」

「嘘つけ。この前までそんなとこに縦線なんてなかっただろうが」  
レキとのやりとりを、春彦は無言で見守りづける。どこで突っ込めばいいのか分からない。そんな春彦の様子を見て、レキは苦笑した。

「シオンのリストバンドの中身と、同じようなもんだ」

言われて春彦は、自分の左手首のリストバンドを握った。その下にあるのは、ナイフでえぐるように切った傷跡。

春彦はリナと同じような傷跡を、自分の手首に見たことがあった。茶色く色素沈着した傷。時間がたてば白くなるだろうその傷を。春彦の方を見たりリナは、少しだけばつの悪そうな顔をしてから笑った。  
「私もね、自分の身体切るの。それだけ」

淡々としているのに、深く感情のこもった声だった。





滴り落ちる赤がコンクリートに落ちて、小さな模様を作った。

それを見て我に返る。途端に、蝉の鳴き声が近くなった。かすかに聞こえる水しぶきの音と、ホイッスルの音。少しだけひんやりとした影の中。

ぼたり。

自分の左腕から滴り落ちた血がまた一つ、地面に模様を作る。ぼんやりした頭で、腕の傷を確認する。思ったより深く切れている。それ以外に、特に思ったことはなかった。

夏の体育は毎年恒例の水泳で、私はうんざりしていた。水着どころか、半袖を着れるような腕でもなかった。別にこの傷を晒してしまつたつて構わないけど、詮索されるのは鬱陶しい。結局体育の時間はすべて見学することにした。

光を反射する水。響くホイッスル。人の声。水の音。蝉の鳴き声。蒸し暑い空気。

いつ限界が来たのかは覚えていない。とにかく、その場にいたくなかった。トイレに行くと言つてプールサイドをこつそりと抜け出してきた。

リナはあたりを見渡した。ほとんど一日中影になっている、少しひんやりとした体育館裏だった。無意識のうち到这里まで来ていたらしい。確かにプールサイドから一番近くて人目に付かない場所はここだが、どうせならトイレの個室にこもって切ればよかったのにと苦笑した。

腕を見下ろす。赤く染まった腕に、無数の線。ああやつぱり汚いな、と思う。水着姿の皆の腕はともきれいだつた。腕だけではなく、いろんな意味で私は汚い。

右手に握っている血に染まった剃刀を見る。お気に入りのピンク

の剃刀は、いつも持ち歩いていた。ただ、手当の道具は持っていない。

とりあえず腕と剃刀を洗わないと。あと、止血。リナはフラフラと歩き出した。体育館横の細いスペースに、水道があったはずだ。放課後には部活動のために使われているその水道も、この時間帯には使われていない。そこで腕を洗って、なんとか止血して、プールサイドに戻らないと。

体育館裏から横に出ようと、角を曲がったりリナは絶句した。水道のそばに誰かいる。しかもそれは、見たことのある顔だった。

人一倍小柄な彼女は、整った顔に眼帯をしているせいか、ひどく目立っていた。いや、目立っているのは顔だけじゃなく体型もだろう。彼女はとても細かった。昼食の時間になると教室を出て行って、授業前に戻ってくる。人見知りが激しいのか、クラスではほとんど話さない。学年の間でも、結構有名な子だった。

彼女はこちらを見て、そのまま固まった。そんな彼女の様子を見て私はようやく、自分が腕の傷を晒したまま歩いていた事に気付いた。慌てて腕を背中の方に持っていくが、今更だ。

何を言われるのかは予想がつく。今までのような人間に言われた言葉。

「気持ち悪い」

「かわいそう」

「頭おかしい」

「ただど彼女は、そのどれも言わなかった。

「……とりあえず、洗いなよ」

ひどく落ち着いた口調だった。私は思わず、彼女の腕を見た。半袖を着ている彼女の腕はやっぱり細くて、だけど傷なんて見当たらない。

彼女も私も黙った。蝉の鳴き声がうるさい。既に見られてしまったんだから、もういいや。私は水道に近づいて、栓をひねった。暑さの所為で、生ぬるい水が出てくる。その生温い水に、自分の左腕

を晒した。透明な水は赤くなつて、排水溝へと流れて行く。血は止まる様子もない。

ぬるかった水が冷たくなり始めたころ、私は彼女の方をもう一度見た。彼女は片目で、私の方をじつと見ている。その眼から、感情は読み取れなかった。

「…どうしてここにいるの？」

訪ねたのは私の方だけど、私が訊かれてもおかしくない質問だった。だけど彼女は確か、気分が悪いとかで保健室に行っていたはずだ。

「嫌いだから」

彼女は小さな声ではつきりと言い放った後、付け加えた。

「教室も保健室も」

「…ふうん」

気の利いた返事が思い浮かばなくて、適当な返事をする。流れる水の音が、妙に心地いい。

「血はとまったか？」

彼女が立ち上がり、こちらの方へやって来る。どうしようかと思っている間に、傷口を覗かれた。

「深いね」

見たままの感想を、特に感情こめずに言われる。隣に立った彼女は、やはりかなり小さかった。

「怖くないの？」

私は思わず、彼女に訊いた。彼女は私の方を見上げて、それからまた傷へと視線を戻しながら言った。

「人よりは見慣れてる」

「そうじゃなくて」

私は彼女の細い腕を見ながら、少しだけ声を低くして尋ねた。

「私のことが怖くないの」

その声は思った以上に震えた。

「おかしいとか思わない？こんな…」

「痛そうだとは思っ」

彼女は相変わらず小さな、だけどこちらにも聞こえる声ではつきりと言った。

「だけど怖いとかおかしいとかは思わない」

「…おかしいでしょ？」

「おかしくない。…それが、そう思うわたしがおかしいのかもな」

私は何も言えなくなって、黙り込んだ。彼女は自分の左手を眼帯の上に乗せて、何かを確認するように言った。

「痛くないのか？」

「…痛くないよ」

「うそ」

断言的な口調で、彼女は言った。だけど本当に痛くない。私は自分の左腕を確認した。いまだに血の止まっていない左腕は、やはり何も感じていなかった。

「本当よ。痛くない」

「痛いのはきつと、腕じゃないんだよ」

彼女は私に向かって真っ白ハンカチを差し出してきた。私はそのハンカチと、彼女を交互に見比べる。彼女は私の目を見たまま、動かなかった。私はもう一度ハンカチに視線を落とす。こんな綺麗なハンカチに、私の汚い血をつけるなんてできない。

ためらっている私の腕を、傷口に触れないように彼女は掴んだ。

そして、傷口の上から何のためらいもなしにハンカチを巻き始めた。白い布ににじむ赤。私の腕は震えていた。

「本当に痛いのは、腕じゃない。痛がつてるのは、心の方」

彼女はハンカチをぐっと縛ると、私の左手を包み込むように両手を軽く添えた。

「…そんなこと、ないよ」

私は笑った。つもりだった。

「痛くないよ。どこも」

「…だったらなんで、泣いてるの」

私は笑えていなかった。私は泣いていた。本当に震えていたのは声でも腕でもなくて、それはきつと私の心だった。

「血が止まらないようなら、保健室に行った方がいい。私は保健室が苦手だけど、先生はいい人だから」

彼女はそう言つと、校舎へ向かつて歩き出した。

「…坂東さん！」

私はようやく、彼女の名前を呼んだ。彼女が振り返る。

「あの…」

振り返つた彼女を見た途端、何を言えればいいのかわからなくなつて口ごもつた。

「ハンカチなら別にいい。あげる」

彼女は私の顔を見ながら、ほんの少しだけ微笑んだ。それでも何も言わない私に、小さな声をさらに小さくして言った。

「…このことは言わない。誰にも」

再び歩き出す彼女を、ただ見つめた。濡れているはずのハンカチが、温かかった。

リナは、ポーチの中からシミのついたハンカチを取り出した。あの時のハンカチは、今でも剃刀と一緒に持ち歩いている。洗っても茶色いシミが残ってしまったハンカチは、あの日以来使っていない。伸びをしながら、ベッドの上に仰向けに寝転がった。見慣れた自分の部屋の天井。一番日当たりが良くて一番大きな部屋を、と与えられたリナの部屋は、確かに日当たりも良くて広かった。その分、孤独感が増す。家が広ければ広いほど、一人だという事実が浮きあがる。誰もいない家に入った瞬間の、暗くて冷たい空気。リナはこの家あまり好きではなかった。ため息をついて、そばにあったぬいぐるみを何となく触る。遊園地で取ったアルパカのぬいぐるみは、触り心地がとても良かった。

さみしさは増す。切れば切るほど。いつまでたっても埋まらないその穴は、いつからか当たり前のように自分の中にあった。当たり前のように心の中にあるくせにその存在感は強烈で、毎日毎日叫ぶように啼く。さみしい。さみしい。埋めたい。

ブブブブブブ…。ベッドサイドに置いていた携帯が震えた。

ディスプレイに表示された名前を確認してから、通話ボタンを押す。自分から声は出さない。出したくなかった。

「…あいてる？」

若い男の声で、一言。

「うん」

スケジュールも、心の中も。スカスカだよなあ、と思わず笑った。

「何笑ってんだよ。気持ち悪い」

「別に」

「今夜」

それだけ言い残すと、相手は電話を切った。場所も時間も言わない。言わなくても分かるから。通話時間13秒と表示されたディスプレイを、リナは無言で見つめた。

身体を切ることも、『これ』も。私はまだ続けている。いつまで続ける気なんだろう。

「…埋まるまで」

声に出してみしてから、嗤<sup>わら</sup>った。ハンカチをポーチにしまって、代わりに剃刀を取り出し、キャップを外す。刃を腕に押し当てて、それからもう一度嗤<sup>わら</sup>った。

こんな方法では埋まらないなんて、とっくの昔に知ってる癖に。



どんぶりの上のあふれんばかりのモヤシに、春彦は辟易していた。あふれんばかりというか、あふれていた。大量のモヤシの所為で、肝心の麺が見えない。

レキが安くてうまくてオススメだから行こうと誘ったラーメン屋は、確かに安かった。モヤシラーメン1杯400円。学生としては嬉しい値段だ。ただしその値段に反して、量がえげつなかった。確かに自分はモヤシラーメンを頼んだが、そこまでモヤシ好きだった覚えはない。目の前に置かれたどんぶり、その上に山のように積まれたモヤシを見て目を見開く春彦に、レキはニヤニヤしながら言った。

「おもしれえだろ」

「面白いとかいう問題か…?」

「大丈夫ダイジョーブ！意外とあっさり食べられるんだって！」

レキは春彦に割り箸を手渡してから自分の割り箸を割ると、モヤシを落とさないように慎重に、かつ器用に食べ始めた。春彦もそれに倣う。モヤシにはピリ辛のタレがかかっている、確かにうまかった。しかしこれでは、麺にたどりつく頃にはすっかり伸びているだろうと思う。春彦はモヤシをひたすら咀嚼しながら言った。

「…次にこの店に来た時は、俺はモヤシの量を半分にしてもらえるように頼もう」

「マジで?じゃ、その分俺に乗っけてもらおうかな」

「…男子学生二人が真剣にモヤシを食べてるこの光景は、結構シユールだと思っぞ」

このラーメン店はガラス張りで、外の風景がよく見えた。逆に言うと、外から店内の風景もよく見えるということだ。

「だけど安いし美味いだろ?」

「まあな…」

春彦はレンジで、スープを掬おうとした。しかし、モヤシが邪魔で掬えない。春彦はスープを諦めて、モヤシに専念した。

モヤシを半分以上食べ終わった頃、春彦は食べ疲れて一服していた。レキはというとその勢いを止めることなく、既に麺に取り掛かっている。ピリ辛のモヤシは確かにうまいが、続けて食べると辛い。春彦は水を飲みながら、何気なく外の通りを見た。入店した頃は薄暗かった空は、すっかり暗くなっている。駅から近いせいか、店の外を通る人はそこそこ多かった。その中に、見知った顔がいた。気がする。

「あれ…？」

思わず声に出して呟いた。

「どうした」

レキが麺をすすりながら、春彦の方を見上げる。

「あれ、リナじゃないのか」

春彦が見ている方へ、レキも視線を移す。

ワンピースに薄い長袖カーディガンを羽織っているリナらしき人物と、若い男が何人か連れ添って歩いているのが見える。若い男たちは正直言つて、素行の悪そうな連中だった。そして、その顔はいかにも下心丸出しだった。

「ガラの悪い連中だな、人違いか？」

と言いながらもその後ろ姿を目で追っていると、レキが残っている麺をすすりあげる音が聞こえた。

「行くぞ」

「え？」

窓の外から視線を戻すと、レキは既に立ち上がっていた。声が明らかに苛立っている。

「あれはリナだ。追うぞ」

「追うぞって、ちょっと待てよ…」

春彦が抗議の声をあげている間に、レキが会計を済ませている。

「なんでだよ、どういうことだ」

「おまえあれが、普通の楽しいデートに見えたか」

見えなかった。第一、デートにしては人数がおかしい。リナ1人に対して、男は3人もいた。しかも、ガラの悪い奴らばかり。

「あんまり介入するつもりはなかったんだけどな…」

レキが呟くのを聞いて、春彦は勘付いた。

「何か知ってるのか？」

レキがこちらを見る。その眼に宿っているのは怒りと、

「まあな。後で説明する」

悲しみ。

その眼を見た春彦は諦めて、鞆を掴んで立ち上がった。結局、肝心の麺は1本も食べられなかった。ああ、次にこの店に来た時は絶対に、モヤシの量は減らしてくださいと言おうと思いつながら春彦は店の外に出た。

「どこに行ったのか分かるのか？」

前を早歩きするレキに、息を切らしながら問う。

「大体。でもどれに入ったかは分からない」

レキが向かったのは…ホテル街だった。

この行為がどれだけ間違えているか、どれだけ自分を傷付けているかなんて知ってる。どれだけ、自分のことを汚くしているのかも。だけど耐えられない。一人は嫌。さみしいのは嫌。寒いのも、嫌。本当はこんな行為よりも、あの子のくれたハンカチの方がよっぽど温かかったってことも知ってる。私のこれはただただ冷たくて、意味がない。身体を切るのと一緒。なのにすがりつく。

行為中の男の目は嫌い。冷たいから。モノを見る目。それも、汚いものを。私は眼をつむって、自分が一人じゃないことだけを確認する。ベッドのきしむ音がしてるその間だけは、私は絶対に一人じゃない。絶対に。

「お前さ、よくこんな子紹介してくれたな。結構かわいいじゃん」  
男の一人が、金髪の男に声をかけた。金髪の男は私に電話をかけたきた相手で、いつも男を紹介してくれる。私はお金をもらって、あとは眼をつむっていればいい。本当はお金だっていらなけれど、お金を貰わなければ、私のこの行為はもつと理解されがたいものになるんだらうと思う。

独りじゃない時間がほしい。本当はそれだけ。

「まあ、でもこいつ、キズありですから。だから格安」

金髪の男が意味ありげに笑った。こいつは、私の腕の傷のことを知っている。この男が最初に私の左腕を見た時の感想は、「気持ち悪い」だった。

「…今日は包帯巻いてきたから」

私はぼそりと呟いた。それを聞いて、長髪の男が勘付いたらしい。「え、なに！？もしかしてこの女、腕切ってんの？」

その声と顔には、興味の色しかなかった。

「マジで！？なあちよつと見てみたいんだけど」

「あんまり見ない方がいいぞ。やる気うせるから」

金髪の忠告を聞かずに、長髪の男が無理やりカーディガンを脱がせる。その下から現れた包帯を見て、指をさして笑いながら包帯を取った。

汚いものを見る目。気持ち悪い物を見る目。憐れみの目。

私が、怪物になる瞬間。

男二人でラブホテルに入ると、かなり勘違いされる気がする。という心配は必要なかった。レキが探していたのは、ラブホテルではなくてビジネスホテルだった。リナが歩いていった方向にはラブホテルが立ち並んでいたが、レキはそこをさっさと通過すると、ビジネスホテルを探せと言ってきた。

「…なんでビジネスホテルなんだ？」

思わず問いかける。ラブホテルだと決めつけていたのもどうかと思うが、男女で行くホテルと言えばやっぱりあちらだろう。

「1対3のあの組み合わせじゃ、ラブホには入りづらい。入店を断られる可能性も高い」

「そうなのか」

「知らなかったのか？」

春彦は黙り込む。知らなかった。

「だとすれば多分、ビジネスホテルの4人部屋だ。それならまだ不自然じゃない」

正直、それも希望的観測だ。何もホテルに入ったとは限らない。男の家に連れ込まれた可能性だってある。春彦はそう思ったが、声には出さなかった。

ホテル街を抜けてしばらくすると、少しさびれたビジネスホテルを見つけた。レキは迷わずそこに入ると、フロント係に笑顔で尋ねた。

「ついさっきここに、男女4人組が入りませんでしたか。多分、予約名は相葉」

フロント係が名簿を確認する。

「さっきチェックインされたところですが…」

ビンゴ。春彦は感心した。

「部屋番号、教えてもらえませんか」

さすがにフロントが不審に思ったらしく、「どづい御用件でしようか」と訊いてきた。

「忘れ物をね、届けに来たんです」

レキはにやりと笑って言った。

上昇するエレベータの中で、レキは回数表示をにらみつけていた。しばらく無言だったが、

「…これがな、初めてじゃないんだ」

「え？」

「リナがホテルに入るのを、何回か見たことがある。だから分かった」  
レキの顔は笑っていなかった。むしろその顔には、怒りの感情が浮かび上がっていた。

「出来るだけ穏便にするつもりだけど、万が一の時はお前がリナを連れて逃げる。リナの家は、ここからそんなに遠くなかったはずだ」

「お前は？」

レキはふっと笑った。

「リナの代わりに、あいつらのお相手をしてさしあげるだけだ」

目的の階につき、ドアが開いた。

「行くぞ」

呼び出しに伝えてドアを開けたのは、金髪の男だった。そしてその男は間違いなく、ラーメン屋の中から見た男たちの一人だった。ドアが開いた瞬間、レキは開いた隙間に自分の右足をねじ込み、ドアを閉められないようにする。男は足元を見てから、怪訝そうにレキの方を見た。

「赤茶髪のさ、女を探してるんだ。この部屋にいない？」

「あ？お前何言ってる…」

その言葉の続きを言う前に、レキが力いっぱいドアを開ける。ドアを開けられ、金髪の男がひるんだすきに股間に一発かなり強い蹴り。金髪の男はうめいて、その場にしゃがみこんだ。あれは相当痛いだろうなと、後ろから見ていて春彦はぞっとした。

しかし、部屋の中ではさらにぞっとする光景が広がっていた。

ベッドサイドにいる、ワンピース姿の女は間違いなくリナだった。その腕から滴り落ちる血。腕には、生々しい傷が何本もあった。

「…レキ…？」

弱々しい声で、リナが言う。その眼は、まるで夢でも見ているようだった。

周りを取り囲んでいるのは、上半身裸の男たち。中には下着姿の者までいた。

「何だお前ら！？」

怒鳴る男たちを見て、レキがため息をつくのが聞こえた。

「…シオン。俺があいつらの相手をするから、その隙にリナと一緒に逃げる」

レキが低い声で呟いた。

「けどお前、3人相手だぞ」

一人は股間に手を当ててうずくまっているので、2人と言っても



いいんだが。

「お前、喧嘩弱いだろ？」

レキはこちらを見て笑った。その顔にはやはり、怒り。そして悲しみ。

「俺一人の方がやりやすい」

「でも、」

「頼む。言うとおりにしてくれ…!!」

レキの低く唸るような声。春彦はレキの顔を覗き見た。彼は、いつもの彼ではなかった。

怒つてるとかキレてるとか、そんな言葉でも釣り合わないくらい、深い感情のこもった顔をしていた。

春彦はその顔を見て、覚悟を決めた。

「…分かった」

「…サンキュ」

レキが男たちに近づこうとするのを見て  
「でも」

と付け加えた。レキがこちらを振り返る。

「誰も、殺すなよ」

誰も、を強調して言った。意味がわかったのか、レキはにやりと笑ってから言った。

「当たり前だ。ちゃんと帰ってくる。…また後で会おうぜ」

レキは笑って手を振りながら、部屋の中央へと歩いていく。春彦はその後ろを、足音をたてないように歩いた。

「何だお前ら…」

そう言ってきた男にレキが殴りかかるのと、春彦がリナの腕をつかむのは同時だった。

「リナ、逃げるぞ!!」

春彦はできるだけ大きな声で言ったつもりだったが、リナはぼんやりとした様子で春彦のことは見ている。春彦は腕に力を込めて、リナを引っ張り上げた。よろよろと立ち上がるリナは、事情が分か

っていないようにも見える。

「ぐあつ!!」

走り出した春彦たちの背後から、男がうめく声が聞こえた。レキのものなのかは分からない。だが、振り返ろうとは思わなかった。とにかく全力でここから逃げなければ。

春彦は床に落ちていたカーディガンを拾うと、リナの腕を引っ張ったまま走りだした。

「待てよ teme エラ! ふざけんじゃ…」

叫びだした男の前に立ちはだかったのは、額から血を流しながらもほほ笑んでいるレキだった。

「何だお前、邪魔っ…」

「お前らの相手は俺だっつうの!!」

男の顔を片手でつかむと、そのまま壁に叩きつけた。ゴツという鈍い音と、「うあ!」と叫ぶ男の声が同時に響く。

「さっきのお返しだ」

レキの顔は、笑っていなかった。

ホテルから少し走ったところに、人気のない公園があった。リナも息が上がっているし、自分も脇腹が痛かった。そういえばさつきまで、モヤシを食べていたんだ。給食の次の時間の体育を思い出した。

春彦は後ろを振り返って誰も追ってきていないことを確認してから、周りを見渡して誰もいないことを確認した。

「…ちよつと休憩する？」

リナに話しかけると、虚ろな目で、それでも頷いた。園内の木製ベンチにリナを座らせ、少し考えてから訊く。

「傷、見せてもらっても大丈夫か？」

リナはこちらを見てから、自分でカーディガンの袖をめくった。血のにじんだ深めの傷が5本。春彦はしばらく見つめてから、声のトーンを落として言った。

「縫う必要はないと思う。だけど家に帰ったらちゃんと消毒してくれ」

リナは無言で、カーディガンの袖をもとに戻した。よく見たらカーディガンにも血がにじんでいる。春彦はため息をついて、リナの隣に座った。

「…気持ち悪いと思わないの？」

リナが、足元を見ながら小さなかすれた声で呟いた。

「なにが？」

「私が何してたのか、分かってるんでしょ…？」

レキに後で詳しく説明すると言われていたものの、結局あまり説明されていない。春彦は先ほどのホテルでの様子を思い出しながら、一番当てはまりそうな単語を出来るだけ小さな声で言った。

「援助交際？」

「もつと酷い。…お金目的じゃないもの」

リナが薄く嗤った。

「さみしいのを埋めたいだけなの。自分勝手な理由で、男の人を利用してるだけ」

リナはカーデイガンの上から、自分の傷口に触れた。カーデイガンの血のにじみが、少しだけ広がる。

「ママが死んでから、パパは変わった。いろんな女の人と付き合うようになった。お金はくれるけど、家には帰ってこない。広い家はさみしい。だから娘は、いろんな男と付き合うようになりました。おしまい」

リナは足元から少しだけ目線を上げると、ふっと嗤った。

「パパの所為じゃないの。私がさみしがり屋だった。それだけ」

「レキはそのこと知ってるのか？」

「レキもユウも知ってるわ。知ってるだけじゃなくて、止めようとしてくれる。だけど私、辞められないの。切るのと一緒に」

カーデイガンに添えた右手に、ぐっと力を込める。

「…なんで来たの？」

リナの声には、何かの感情がこもっていた。怒りでも悲しみでもない、何か。

「放っておけばいいじゃない。馬鹿な女のことなんて、さ」

夏の夜の生ぬるい風が吹いて、頭上にある木の枝を揺らした。ひとりでに少しだけ揺れるブランコ。春彦はブランコを見ながら、レキの顔を思い出していた。

「レキは、お前には怒ってなかったよ」

リナがこちらを見る。春彦もリナの方を振り返り、続ける。

「レキはあの男たちには怒ってたけど、お前には怒ってなかった」

「なんで…」

「お前のさみしさを利用したあいつらが許せないんだろ」

「…。」

「さっきリナはさみしさを埋めるためにあいつらを利用してるって

言っただけで、逆にも考えられる。あいつらが自分の欲望を埋めるために、リナのおさみしさを利用してるんだ。その傷を見せ物みたいにして。レキはそれが許せなかった」

揺れていたブランコが少しだけきしんで、キイ…という高い音を出した。

「お前のことを物みたいに扱っただけは、俺も嫌い。リナをあそこから連れ出したのは別に前を助けたんじゃない、単なる俺たちのエゴかな」

春彦は少しだけ頬を緩めた。リナは今にも泣き出しそうな顔で、

「レキは…」

その声は震えていた。春彦は携帯電話を確認する。着信は入っていない。

「…大丈夫だよ」

春彦はほほ笑んだ。リナを安心させるためでもあったが、自分が安心したいためでもあった。

「約束したから」

目の前にいる男たちに夢中で、後ろにいた男に気付かなかった。

一番最初に蹴りをいれた金髪の男が、こちらに近づいていることに

どろ…。

後ろから、体当たりされたような衝撃。そのあと、腰の方に激痛が走った。

「…あ？」

レキは後ろを振り返る。金髪の男がヒューヒューと荒い息をしながら、こちらを上目づかいで睨んでいる。そのあと、レキの腰を見て、後ずさりした。

レキは自分の腰を見た。厳密には、腰から少し左側を。

自分に刃物が突き刺さっていると分かるまでに、酷く時間がかかった。

どろりとした生ぬるい液体が、身体を伝う感触。状況は理解できたはずなのに、思わずもう一度声を出した。

「…あ？」

そしてそのまま、床に倒れこんだ。

「帰ってくるって、約束したから」

春彦の声が、遠くの方で響いた。

どんな顔をすればいいんだろう。病室が近付くにつれ、不安になった。腕に抱えた花束を覆っているセロハンがカサカサと揺れる音を聞きながら、リナは自分の顔がどんどん暗くなっていることを自覚していた。

レキが刺されて入院したという報告を受けたのは、翌日の朝だった。シオンから聞いた話によると、レキが倒れているのをホテルの係員が発見したらしい。他の男たちはすでに逃げていなかった。幸いにも内臓は傷ついておらず、全治3週間。警察に事情聴取されたレキは、知らない男に突然刺されたと言ったらしい。

「なんで…」

その報告を受けた時、思わずリナは呟いた。なんで、の続きにはいろんな意味があった。

なんで刺されたのか。なんで嘘をついたのか。

「直接聞きなよ」

シオンはそう言って、レキの入院した病院と、病室を教えてください。

レキのいる大部屋が見えて来た。ネームプレートを確認すると、4人部屋のその部屋には現在レキしかいない。一瞬迷ってから、何も言わずにドアを開ける。

パジャマ姿のレキは、窓側のベッドで頬杖をついていた。ドアの開く音を聞いて、こちらを振り向く。それから、笑った。

「よお」

それはまるで、いつもの朝のあいさつのように。

「…よお」

思わずオウム返しで返事をした後、顔をそむけた。

「大丈夫だったか」

そう声をかけてきたのはレキの方だった。

「…私は。シオンも無事」

「よかった」

「よくないわよ」

必要以上に大きな声で返してしまつてから、また口ごもつた。

「…お前いつまでそこに突っ立つてんの。こっちくれば」

レキがいててと言いながら、ベッドのそばにあったパイプいすをベッドの方に寄せた。リナはゆっくりと椅子に近づき、座る。そのあと、見舞いの花を持ちっぱなしだったのを思い出した。

「…後で花瓶貸して」

「おお、サンキュ」

「…傷、大丈夫？」

ようやく、訊きたいことの一目を訊けた。その質問に、レキは苦笑した。

「お前の腕よりマシ」

「私の傷なんか大したことないわよ」

「ただとお前の傷の方が痛そうだ」

と言つて笑つた。リナはレキから目をそらす。どんな顔をすればいいのか、分からない。今自分が、どんな顔をしているのかも。

「なんでウソついたの」

「あ？」

「あの金髪の男。なんで知らない男だつて言ったの。私があいつの連絡先を知ってるの、あんただつて知ってるんでしょ」

「ああ」

レキは花束を見ながら、少しだけ声を小さくして言った。

「それ言ったら、お前がやってたことも全部ばれるだろ」

「…。」

「おかげさまで、警察では不良同士のケンカつて話になつてるよ。中学の頃、俺も結構やんちゃしてたしな」

レキが笑おうとしてから、いてて…と小さくうめいた。



「やっぱり痛いんじゃない」

「そりゃな。身体切れてんだから」

リナは自分の左腕に、右手をのせた。

「お前はさ、確かに一人だよ」

レキがその様子を見ながら、真剣な口調で言った。

「だけど、独りじゃない。そばに誰かいなくても、お前のことを思ってるやつはいる。そういう意味で、お前は独りじゃない」

リナは顔をあげた。レキと真正面から視線がぶつかる。レキはほほ笑んだ。

「俺たちじゃ、埋められないかもな。だけど何度でも言う」

ぼやけた視界の中で、その声ははっきりと聞こえた。

「お前は独りじゃない」

花瓶と花を持って、リナは部屋を出た。ふと横を見ると、廊下の向こうから小さな人影があるいてくるのが見えた。

「…ユウ!？」

それは確かに、ユウだった。ユウはリナの方を見て、片手をあげた。

「シオンから、レキが入院したって聞いて」

リンゴの入った袋をガサガサイわせながら、ユウがリナに近づいてくる。

「…シオンから、その話聞いた？」

「え?」

「なんで刺されたか、とか…」

「なんか、他校の不良と喧嘩したって聞いたけど」

シオンもレキも、私のことは何も伝えていないらしい。ユウは警察と一緒に、レキが刺された原因をただの喧嘩だと思っている。リナは黙り込んだ。

そんなリナの顔を見て、一瞬だけユウが目を見開いた。多分、私の目は充血してるんだと思う。あれだけ泣いたんだから。

ユウはこちらを見ながら、小さな声で、けれどもはつきりと言った。

「…おかえり」

リナは驚いて、ユウを見た。どこかに行っていた覚えはない。だけど、

「…ただいま」

やっと帰ってこれた。そんな感じがした。

携帯の電話帳から、あの男のアドレスを探す。そしてそのまま消去した。

剃刀は相変わらずポーチの中に入ったままで、手放す気はない。リナはアドレスが消去されているのを確認すると、携帯を閉じた。せめてこれだけでも、もう辞めよう。

穴は埋まっていない。だけど、

私は、独りじゃないから。

「ごめんね」

これで何回目だろうか。あなたの所為じゃない。泣かないで。泣かないで。

「あんなに綺麗な顔だったのに」

わたしは別に大丈夫だよ。ねえ、大丈夫だよお母さん。

薄暗く湿った部屋で、母はわたしの左目を見ては、何度も泣いた。わたしはそれよりも、母の身体のうちこちにある青痣の方が気になつていた。自分の目のことなんて、どうでもいいのに。

あの男の動く気配がして、わたしも母も黙りこんだ。ただの寝返りだったけれど、それだけでもわたしたちは緊張した。

母は何度もごめんねと言って、わたしを抱きしめて泣いた。ごめんね、ごめんね。

わたしは泣かなかった。泣けなかった。すっかりしなくちゃ。わたしが泣いたら、母が不安がる。

「おかあさん、わたし、大丈夫だから」

笑ったわたしを見て、母がまた泣いた。あの男には聞こえないように、声を押し殺して。

「ねえ、大丈夫だよ」

すこしだけ。少しだけ人よりも我慢すればいいんだ。食べるのを少しだけ我慢して、声を出すのも我慢して、泣くのも我慢して、殴られたり蹴られたりするの、我慢すればいい。わたしが頑張ればきつとすべてがうまくいく。

「ごめんね、ごめんね」

母は壊れた機械のように、それを繰り返した。その声は、今でも耳の中に残っている。

「大丈夫だよ」

わたしもこれを何回繰り返しただろうか。だけど、大丈夫。きつ

と、きつと。

「うるせえぞ!!」

隣の部屋から怒鳴る声が聞こえて、母とわたしは身を硬くした。少しずつ開く襖と、差し込む光。男の表情はちょうど影になっていて、見えない。

髪の毛を引つ張りあげられて、わたしは少しだけうめいた。母が横で必死に「やめてください」と言っているのが聞こえる。

大丈夫、大丈夫、すこしだけ、がまんすればいいの。すこしだけ、感情をなくせばいい。

そのうちきつとこの男の人は、魔法が解けてお父さんに戻るから。

わたしはゆっくりと目を閉じて、痛み集中する。腹部を蹴られた痛みが響き、そのあと顔に殴られたような衝撃。母の叫ぶ声が聞こえる。

大丈夫、だいじょうぶだよ。おかあさん、わたし、だいじょうぶだよ。

だから…ねえ、泣かないで。

会議室に充滿している甘ったるいにおいに、春彦は驚いた。そこにいたのはユウ一人だけ。チョコレート菓子を食べていたユウは、ノックもせずにドアを開けた春彦に驚き、それから一瞬だけしまったという顔をした。春彦は啞然とした。机の上にあったお菓子の空袋は、尋常な量ではなかった。

ユウはごみをかき集めて立ち上がると、ドアの前で立ち尽くしている春彦の横をすり抜けて走って行った。ちょうど後ろから来ていたリナにぶつかっただけで、「わ！」と言っリナの声は廊下に響いた。

「食欲の秋、か？」

後からやってきたリナは春彦のそのひとりごとを聞いて、顔が曇った。

「あの子、何してた？」

「なんかお菓子食べてたけど」

「…。」

リナの様子がおかしい。自分が何かまずい物を見てしまったような気がして、春彦は押し黙った。何となく気まずいので、窓を開けようと部屋の奥へと歩いていく。開けた窓からは、少しひんやりした秋の風と、部屋のそばにあるイチヨウの木が舞い込んできた。「最近、ユウの様子おかしいよな」

気になっていたことを、声に出してリナに尋ねた。本人には尋ね辛かった。

「…そう？」

「ああ、なんかいつもフラフラしてるってどうか。顔色悪いし」

「…かなあ」

その時ちょうど、春彦の携帯が鳴った。初期設定のままの呼び出し音は、部屋の中で必要以上にうるさく響いた。

「おう、レキ？…ああ、分かった」

必要最小限の会話をして、電話を切る。

「今日レキ、バイトがあるから来ないって」

「…そう」

大きな風が入りこみ、カーテンがバサツという音を立てた。以前自分たちが崩してしまったプリントの束は、リナがきっちり棚の中に整理していたので、少々の風では崩れない。

「今日はもう帰ろうか」

言いだしたのは、リナの方だった。

「え？」

「ユウもなんか体調悪そうだし。私も今日は用事があるから」

リナはユウが放りっぱなしにしていた鞆を持ち上げると、ドアに向かって歩き出した。

「…じゃあね」

「ああ。…ユウによろしく」

リナが出て行き、一人きりになった春彦は窓をそっと閉めた。暴れていたカーテンが、途端に大人しくなる。

部屋の中にはまだ、甘ったるいチヨコレートの匂いがかすかに残っていた。

トイレから出ると、廊下にリナが立っているのが見えた。よく見ると、自分の鞆を持っている。

「大丈夫？」

リナの心配そうな声を聞きながら、手洗い場の蛇口をひねった。手で水をすくってうがいをする。そのあと、口元を洗った。

「シオンに見られたな」

わたしは苦笑しながら、ポケットから水色のハンカチを取り出した。お返しだと言ってリナがくれた白いハンカチは、こういう時には使いたくなかった。

「そうじゃなくて、顔色悪いよ」

リナが不安そうな顔でこちらを見てくる。リナの顔を見ることができず、何もないところを見ながら呟いた。

「大丈夫」

これで何回目だろうか、心の中で自嘲する。

わたしが普段ほとんど食べ物をお口にしないことを、そして、何かに耐えきれなくなると暴飲暴食してそのあとトイレですべて吐き出す事を、リナに知られたのはいつごろだっただろうか。そのことを知った時、彼女はまず私の身体を心配した。

「気持ち悪いとか、嫌だとか思わないのか。自分で食べた物を、自分で吐き出してるんだよ、わたし」

そう言った私に、リナはあっさりと言い返した。

「全然思わない。…そう思わない私の方がおかしいのかな」

そう言って、笑った。

「いつかのお返し」

便座に顔を突っ込んで、食べた物を戻してる時ほど、みじめな時はない。胃の中が空っぽになればなるほど、私の中も空っぽになっ

ていく。食べ物を無理やり詰め込んだところで、自分は空っぽだった。

最初はただ、食べるのを我慢しているだけだった。食事をしていく時が、一番お父さんに『魔法』のかかりやすい時だった。だからご飯を食べるのは嫌いだった。

それがいつからか、痩せるためへと変わっていった。ああそうだと左目が潰れてからだった。母が毎晩泣くようになってから。わたしはなんとか、綺麗でかわいい娘でいようとした。たとえ左目が潰れても、大丈夫だと思わせたかった。そのために痩せようと思った。それだけだったのに。

食べるのを拒否して、怖がって。だけどそんなのがいつまでも続くはずがない。ある日突然何かの糸が切れたように食べて、そのあと太るのが怖くなって吐き戻した。あれが始まりだった。

やせ細った身体は、綺麗なんてものからは程遠かった。知ってはいたけど、食べるのはどうしても怖かった。

「何かあった？」

リナの声で、現実に引き戻される。駅へ向かう歩道にはあまり人影がなかった。

「…なにも」

「だけど最近、様子が変わらない。シオンもそう言ってたよ」

「…そうか？」

鞆を握りしめて、それから抱え込んだ。中に入ってるものを見られないように。

「言いたくないならいいけど」

リナは明るめの口調でそう言うと、

「だけど抱え込まないでね」  
と付け加えた。

「…ああ」

学校の最寄り駅が見えて来たので、わたしは定期券を取り出した。



リナの家はこの近くなので電車には乗らない。駅まで一緒に歩いて帰るのが、いつの間にか当たり前になっていた。

選挙カーからの演説が響いている路上で、リナがその音に負けじと叫ぶ。

「気をつけて帰ってね!」

わたしは改札の方を見ながら、「ありがとう。じゃあな」と返した。

いつもは「また明日」と言っていたことを、その時は忘れていた。

翌日、ユウは学校を無断欠席した。適当な点呼を取る担任はさしてそのことを気にする様子でもなく、さつさとホームルームを終わらせて教室を出て行った。リナが気にしたのはユウが無断欠席したことではなくて、昨日の最後の言葉だった。

「じゃあな」

彼女は確かにそう言った。しかも、こちらを見ないで。

リナは具合が悪いと嘘をついて教室を抜け出すと、ユウの携帯に電話した。しかし出ない。あつという間に留守番電話サービスに繋がれてしまい、リナは諦めて電話を切った。代わりに「今どこにいるの？」とメールをする。なぜか、家にいない予感がしていた。

ユウは事情があつて、祖母と二人暮らしをしている。一度だけユウの家に遊びに行ったことがあるが、優しくて真面目そうなおばあさんだった。あのおばあさんが無断欠席を許すとは思えない。もしかしたらユウは、学校に行くふりをしてどこかに出かけたんじゃないだろうか…。おばあさんに確認したいところだが、ユウの自宅の電話番号までは知らなかった。

授業中も、漠然とした不安がリナに付きまとった。まさか、まさか。

結局2時間目の途中でリナは早退し、ユウに何度か電話をかけた。呼び出し音のなる時間が、とてつもなく長いように感じる。

何度目かで、ようやく繋がった。受話器の向こうで、風が強く吹く音が聞こえる。明らかに屋内ではなかった。

「ユウ!? いまどこ!」

一番聞きたかったことを、真っ先に聞いた。だが、返事がない。

「ユウ…?」

風の音とともに、何かを叫ぶような声が聞こえる。ユウは今どこ

にいるのだろう。続く沈黙が不安で、リナは何も聞き逃さないようにと、携帯を自分の耳に強く押しあてた。

酷いノイズの中で、ようやく聞こえたユウの声はたった一言。

「ごめん」

いつもと変わらない静かな口調で、ただはつきりと、そう言った。「え？」

そう返したときには、既に通話が切れていた。

水曜日の5、6時間目は美術。春彦はこの時間が一番嫌いだった。彼は、致命的なくらい絵を描くのが下手くそだった。今回のお題は石膏のデッサン。のはずである。

ようやく5時間目が終わり、春彦はへばっていた。休憩時間にまで熱心に描き続けているクラスメイトを見つめる。よく集中力が続くなあ、と感心していると

「相変わらず味のある絵を描くね。シオン君」

と背後から声をかけられた。振り返ると、そこに立っているのは予想した通り、にやりと笑っているレキだった。

「目の前にある、この石膏を見て描いたんだよね？」

「…ああ」

「それがなんでこんな、モアイ像みたいになってんの」

「…さあ」

「この石膏、そんなに鼻でかくねえし、ホリも深くねえぞ」

「…そうだな」

これでレキも下手くそならば、「お前だって人のこと言えないだろ」と返すところである。ところがレキは、意外なくらいに絵を描くのが上手かった。一度だけ上手いと誉めたことがあるが、幼馴染ほどじゃないと悲しそうに笑う彼を見てから、その話題について触れるのはやめていた。

「しかも胸像をデッサンするのに、顔だけでキャンバスの4分の3

埋めちまってるじゃん。どうすんの、この後」

「…どうにかする」

その時、レキの携帯が光った。レキは携帯を取り出して、そのまま通話ボタンを押した。

「もしもしリナか？…どうしたんだそんなに慌てて」

返ってきたのは、隣にいた春彦にも聞こえるくらい大きな声だった。

「ユウを探して！！なんかやな予感がするの！！」

「どういうことだ？今日学校に来てねえの？」

「来てないから言ってるんじゃない！」

リナの慌てぶりに、レキと春彦は顔を見合わせた。おそらくこれ以上訊いても時間の無駄だ。レキはうなずいてから、静かな口調で言った。

「…探すって言っても、探すポイントは絞れないのか」

それを聞いて、リナは少しだけ黙った。何かを思い出しているようだった。それから、

「選挙…」

と自分自身に確認するような小さな声で呟いた。

「え？」

「選挙カーの音みたいなのが聞こえてた。多分、駅の近くだわ！！最近、毎日のように駅前で演説やってるから！」

「分かった。すぐ行く」

レキは電話を切つてから、悔しそうに呟いた。

「駅前とは限らないな。選挙前なんだから、演説なんざあちこちでやってる」

「それでも行くんだろ？俺も行く」

春彦は手に持っていた鉛筆を机に置くと、立ち上がった。

「いいのか？さぼりつてことになっちまうけど」

「構わない」

春彦は、昨日見た光景を思い出していた。何かに取りつかれたか

のように、チョコ菓子を食べていたユウを。

携帯が何度も何度も震えている。鞆の中で何度も唸るそれを、ユウはようやく拾い上げた。日は大分傾いている。冷たく乾いた風が、勢いよく吹き抜けた。

電話をかけてきた相手がリナだということは、電話に出る前から分かっていった。ただ、通話ボタンを押したとたんは何を話せばいいのか分からなくなった。何も言わずに黙りこむ。手元にある、黄ばんだ手帳に視線を落とす。

「…ごめん」

ようやくそれだけを振り絞ると、ユウは電話を切った。

『ごめん』

何度も言われたその言葉を、リナたちに。そして、母に。

お父さんにはきつと悪い魔法がかけられているに違いない。そんなことを考えていた。いつもはとてもいい人だった。わたしにも母にも優しくかった。だけど毎日数時間、悪い魔法がかけられる。するとお父さんは普段は見せないようなとても怖い顔をして、母と自分に暴力をふるった。そして魔法が解けると、泣きながらわたしたちに謝った。ごめん、ごめん、すまなかつた。泣きながら土下座する父親を、暴力された回数と同じくらい見た。

母は父のもとを離れようとしなかつた。わたしを手放そうともしなかつた。父が泣きながら謝る姿を見て一緒に泣いて、そのあとにつもわたしに謝った。ごめんね、ごめんね。お父さんはそのうちきつとこんな事しなくなるから。ごめんね、ごめんね。

母が泣きながら謝る姿は、見るのも辛かつた。だからいつも「大丈夫だよ」と笑顔で返していた。少しでも母を安心させたかった。父の暴力で左目が潰れたその時も、わたしは泣きながら笑っていた気がする。大丈夫だよ、大丈夫だよって。

だけど母は、わたしの左目が潰れてからは今まで以上に謝る回数が増えた。

ごめんねごめんね。女の子なのにごめんね。綺麗な顔だったのにごめんね。ごめんね…。

その頃から私は、食べることをやめた。

大丈夫だよ。左目が潰れたって、スタイルが良ければ大丈夫だよ。痩せてれば大丈夫だよ。ねえ、わたし大丈夫だよ。

ユウは嗤った。わたしはなんで、こんなにゆがんだ答えしか出せないんだろうか。

ユウが小学5年生の時、両親は離婚した。DV、という言葉を知ったのは大分後のことで、この頃にはまだよく理解していなかった。ユウは母親に引き取られ、小さなアパートでの二人暮らしが始まった。

ただ、それも長くは続かなかった。

あまり食事をとらないユウを、母親はいつも心配そうな目で見ていた。ユウはそれでも大丈夫だと言い続けた。母親は朝早くから夜遅くまで働いていたため、食事のことはユウ自身でコントロールしやすかった。朝ご飯を少しだけ食べて、後は抜いていた。体重はどんどん減ったし、髪の毛も抜けた。それでもやめられなくなった。

その日母親は出掛ける前に、寝ている自分をゆすり起こした。いつもなら起こさないようにそっと出て行くのに。ユウは半分寝ボケていたが、その時のことは何故か今でもよく覚えている。

「行ってくるね」

「うん」

「…ごめんね」

母は最後まで、「ごめん」と言った。

その日の夕方、母はビルの屋上から飛び降りた。

強い風の吹く屋上は、予想以上に寒かった。母の死んだ夏の日、寒くなかっただろうか考える。夕方の屋上で、母は最後に何を考えていただろうか。

「ごめんね、だった気がする。だとしたら不憫だ。

黄ばんだ手帳を開く。小さな手帳に几帳面な母の文字で書かれた日記には、やはり何回もごめんねと書かれていた。

母が死んだ時、遺書やそれらしいものは何も残されていなかったと祖母から聞いた。だけどそれはただ隠されていただけで、本当は日記が残されていた。祖母が隠し忘れたこの日記を発見したのはつい最近で、それまではこの日記の存在すら知らなかった。

中身を読んで最初に思ったことを、もう一度声に出した。

「わたしを殺せばよかったのに」

その声は強く吹く風に流されて、消えた。



日記には母の不安がびつしりと書き込まれていた。生活費のことだったり、離婚した父のことだったり。だけどそのほとんどは、わたしのことだった。

優子がまた殴られた。蹴られた。私は優子を守ることもすらできない。優子の左目。ごめんね。ごめんね。優子のご飯を食べなくなつた。日に日にやせ細っていく娘を見ていられない。あの人と別れた。優子と話す機会も減ってしまった。今日は仕事。明日も仕事。疲れた。生活はぎりぎり、優子にかわいい服を買ってあげることでもできない。ごめんね。こんな母親でごめんね。疲れた。もう疲れた。ごめんね。

「わたしを殺せばよかったんだよ」

もう一度、手帳に向けて吐き捨てた。母が命をかけて守ろうとしていたものには、それほどの価値はなかった。軽くて空っぽの人形だったのに。罪悪感を震えながらトイレに流して、そうやって自分を保とうとするわたしには、価値なんて、ない。

「いなきやよかつたね。最初からさ」

手帳を鞆の中に入れると、ユウは立ち上がった。低い柵から上半身を乗り出して、下を覗きこむ。細い路地裏の黒いコンクリートとマンホールが見えた。人影はない。

母が最後に見た景色は、どんなだっただろうか。

その景色を見るのは、簡単だった。ここで足を地面から離せばいい。ただそれだけのこと。身体がぐちゃぐちゃになるかもしれないけど、それでもいい。こんな身体、むしろぐちゃぐちゃになってしまえばいいんだ。

目をつむった。あの時と同じように。そしてあの時と同じように、感情をなくす。足を離すと、ふわり、と身体が浮いた。そして落ち

た。

ただ、ユウが思っていたのとは逆の方向に。

前に、そして下に落ちるはずだったユウの身体は後ろへと引つ張られ、屋上の上に倒れこんだ。目をつむっていたので受け身を取れず、背中をしたたかに打ちつけて一瞬息がとまった。

「はあっはあっ…はっ…」

ゆっくりと目を開ける。目の前にいたのは、制服姿のリナだった。ユウを引つ張った勢いで自分も倒れたらしく、尻もちをついている。ここまで走ってきたのか、息を切らしていた。

「なんで…」

ばあんっ！

軽い衝撃。それからジンジンと熱くなる左頬。ビンタされたと感じ付いたのは、頬が熱くなった後だった。「なんで止めたんだ」という言葉はその衝撃でどこかへ吹き飛び、代わりに言葉は何も思い浮かばなかった。

おそろおそろ、リナの方を見る。いつかの父親の顔を思い出していた。怒りや侮蔑しか感じられないような、あの顔を。だが、リナの顔は父親のその顔とは違っていた。

彼女は歯を食いしばって、目から大粒の涙をぼろぼろとこぼしていた。自分を叩いたはずの右手はぶるぶると震えている。いや、腕ではなくて身体も、目も震えていた。

リナが泣きながら、もう一度右手をあげた。また叩かれると思いい目をつむって身構える。次の瞬間、身体が温かくなった。

それは殴られたからではなくて、抱きしめられたからだだった。

強く吹く風で冷えていたわたしの身体が、徐々に温かさを取り戻しはじめ。

「…バカ」

震える声を絞り出すように、リナが囁いた。わたしはそっと目を開ける。

「バカ、バカ…バカア…！」

リナはそのまま、声をあげて泣き始めた。震える彼女の肩は、涙は、それでも温かい。自分の中で凍っていた何かが溶けるような感覚。わたしはそっと目を閉じた。泣いている母に抱き締められた時、わたしは「大丈夫」と言って笑っていたはずだった。

「ごめ…」

喉に何かがつつかえて、最後まで言うことも、笑うこともできなかった。言葉の代わりに、涙があふれ出した。泣いたのは久しぶりだった。

自分がなぜ泣いてるのかもろくに分からないまま、わたしは泣き続けた。

ユウが見つかったという連絡が入ったのは、日が暮れてから大分たつた後だった。春彦とレキは息を切らしながらその報告を聞いて、地面に座り込んだ。

「よかった…」

どちらともなく咳く。そのあと二人同時に腹が鳴って、顔を見合せて笑った。

「腹減ったな、シオンもか」

「ああ。…ラーメンが食べたい」

「この前の店？」

「ああ」

春彦はモヤシラーメンのことを思い出しながら笑った。

「リナ達も来るかな。訊いてみるか」

レキがもう一度、携帯を取り出した。

「…レキが、ラーメン屋に行かないかって言ってるけど…どうする？」

リナが鼻の詰まった声で訊いてきた。

「…行く」

「無理しなくてもいいわよ？食べられないなら…」

「いや、行く。行くだけでもいいから」

わたしは鞆を持って、立ち上がった。リナも立ち上がると、強い風が吹き抜けた。

「…なんでここだって分かった？」

ようやく、私は訊きたかったことを訊いた。

「風の音が強かったから、屋上かなって。今日は下の方はそんなに吹いてないから。後、飛び降りやすそうので誰でも出入りできる屋上

って、この辺ではここくらいしかないから」

リナがそう言うのを聞いて、思わず振り返った。リナは笑っていた。

「私もね、飛び降りる場所を探したことあるの」

その笑顔は、とても綺麗だった。

ラーメン屋に現れた二人は、目が真っ赤だった。

「：おいおい、大丈夫かよ」

レキがわざと茶化しながら言うと、リナが笑いながら

「むしろ泣きすぎておなか減ってんのよ。私、モヤシラーメンね」

「え、リナ、モヤシラーメン完食できるのか？」

春彦は焦った。

「もちろん。あんなのあつという間でしょ？」

春彦がおかしいのか、2人がおかしいのか。春彦にはもはや分からなかった。

「ユウ、どうする？」

「：わたしはいい」

「んじゃ、モヤシラーメン3つ」

と、レキが注文したあとで、

「あと、取り分ける皿とかあったら貸してください」

と、春彦が付け加えた。

「お子様茶碗でよろしいですか」

「あ、それでいいです」

「なんなのシオン。猫舌なの？」

「いや」

春彦は苦笑した。

運ばれてきたモヤシラーメンは、相変わらずのボリュームだった。リナとレキが器用にそれを食べ始めたのを見ながら、春彦はモヤシ

の3分の1ほどをお子様茶碗に移した。そして、

「ユウ、よかつたら食べないか」

と声をかけた。ユウは眼丸くしている。

「モヤシくらいなら、食べても大丈夫かなって」

春彦は少し声を小さくして言った。リナが心配そうにユウの方を見ている。ユウは少しだけ迷った後、

「…食べる」

と言つて、お子様茶碗を自分の元へ引き寄せた。それを見たりながうれしそうに、ユウに割り箸を渡す。

「モヤシはねー、こつ見えても栄養たつぷりなんだからね!」

ユウは頬を緩めて、おそろおそろモヤシを食べ始めた。

「…おいしい」

それを聞いて、春彦も笑った。

「もしも足りなかつたらいつでも言つてくれ。一緒に食べよう」

その日、春彦は初めてモヤシラーメンを完食した。ただし、ユウと二人がかりだったが。

皆と別れた後、ユウは駅のホームのベンチに座つて、母の形見の手帳を開いていた。最後のページには、たった一言、「ごめんね」とだけ書かれていた。

鞆の中からボールペンを取り出す。そして、母の文字の下に書き加えた。

「大丈夫。わたしは生きていく」

店内の温かい色の照明を反射して、テーブルの上のビー玉がキラキラと光った。ひとつ手にとって、照明にかざしてみる。姉は子供のころからそうやってビー玉を見るのが好きだった。綺麗だから。

一日の大半を薄暗い部屋で過ごすようになった後も、ビー玉を眺めていることがあった。

その時の綺麗な姉の横顔を、今でも鮮明に覚えている。

「お前、ここんとこ常連だな」

ビー玉から目をそらす。ドリンクとナゲットを持ったレキがそばに立っていた。

このファーストフード店はレキのバイト先で、春彦の行きつけの店になった。最近では毎日、夕方に食べに来ている。レキがシフトに入っている時間帯なので、会うことも多かった。

「毎日で飽きないか？」

レキはなんの確認もせずに、春彦の向かい側に座った。

「別に。それにここなら、お前がおまけしてくれるだろ」

レキは慌てて人差し指を立てて口元に持っていくと、店内を見渡した。春彦のポテトやナゲットを勝手に増量していることは、店長はおろか他の従業員にも秘密にしているらしい。

「あんまりでつかい声で言うなよ。バレるだろ」

「お前今日、仕事は？」

「終わったよ。お前、何時間居座るつもりだ」

レキに笑われて、改めて腕時計を確認する。気付けば21時を回っていた。入店したのは確か、18時頃だったはずだ。気付けば3時間以上この席に座っている。

「まあ、別にいいけどな。どうせこの店も暇だし」

レキが揚げたてのナゲットを口に放り込んで、「あっちいー!」と叫んだ。自業自得だ。

慌ててドリンクを飲みながら、レキはテーブルへと視線を落とした。

「なんだこれ」

ビー玉の方に顎をしゃくりながら、不思議そうに言った。

「…ビー玉」

「見りゃわかるよ」

レキが笑いながら、ビー玉を手取る。

「何してたんだよ、これで」

「遊んでた」

それを聞いたレキはビー玉と春彦を見比べながら、釈然としない様子で「ふうん」とだけ言った。深く追求するつもりはないらしい。その方が、ありがたかった。

何日か連続でこの店に足を運んだ時は、さすがのレキも不思議そうだった。

「お前、家で飯食わねえの？」

「…家に誰もいないからな」

とだけ言うと、少し間をおいてから「そうか」とだけ返してきた。その日から、ポテトやらナゲットやらソフトクリームやらがやたらと増量されるようになった。

小学校低学年の時に母が死に、それからは姉と二人で生活してきた。父は、母が生きている頃からめったと家には帰ってこない人だった。休日ですら何かにとり憑かれたかのように仕事をしている父の後ろ姿を、子供のころに何度か見たことがある。母が死んでからはますます家に寄りつかなくなり、毎月の生活費を渡すときだけ帰ってきて、後はどこかへ行ってしまふ。そんな父親だった。

年の離れた姉は、まるで母親のようだった。家事全般をこなしながら自らも働いていた。姉は明るい性格で、いつも笑っていた。春彦の授業参観にも来てくれたし、暇があれば遊びに連れて行ってくれた。本当に、母親のような姉だったと思う。

姉はビー玉を、ジャムの入っていた大きなガラス瓶に入れて飾っ



ていた。時々蓋を開けてはビー玉をひとつだけ手にとり、光に照らしながらそれを眺めていた。

その姉が壊れ始めたのは、いつからだっただろうか。

「…シオン、聞いてたか？」

その声で春彦は我に返った。手にビー玉を持ったまま、思い出にふけていたらしい。

「ごめん。なんだったっけ」

「もうすぐ冬休みだろ。その前に4人でどっか出掛けないかって話だよ。冬休みってどこもかしこも混むしさー。俺、ちょうど明日はバイト入ってないんだ。リナ達もあいてるって言ってたし。春に遊園地行つただろ？あそこが候補なんだけど」

「ああ…」

春彦はビー玉を手で弄びながら、

「明日は用事がある」

「え、そうなのか」

「ああ。だから、3人で行ってきてくれ」

「んー。4人で集まった方が面白いんだけどな」

「次の遊びには参加するよ。どうせリナ達は、明日行く気満々だろ？」

春彦は笑った。彼女たちが遊園地ではやたらと積極的だったのを思い出した。レキも思い出したらしく、苦笑いした。

「まあな」

「明日は、薬飲みすぎるなよ。遅刻したらまた怒られるぞ」  
「分かってるつつつの」

レキがまた苦笑いした。それから、春彦の目を見ながら真剣な顔をした。

「なんかお前、大丈夫か？」

春彦は弄んでいたビー玉を机の上に置いた。ガラスがテーブルに当たる、カツンという音がやたらと大きく聞こえた。

「…大丈夫かどうかは分からないが、どうにかなるだろ」

「そうか」

レキはそれだけ言って、ナゲツトを口に放り込んだ。もう冷めていたらしく、一口で食べても平気だったらしい。

「…何も訊かないんだな」

春彦は、すっかり氷の溶けたアイスコーヒーを飲みほしながら言った。

「…聴いてほしいのなら、聴く」

その言葉を聞いてから、空になったドリンクカップをトレイの上に戻す。

「いや、いい」

「言いたい時はいつでも言ってくれていい。だけど、言いたくないときは言わなくていい」

そう言い残すと、ドリンクを持ったままレキは立ち上がった。

「悪いな。俺はそろそろ帰る。お前も早く寝ろよ」

「ああ。リナとユウによろしく言っといてくれ」

手をあげながら歩くレキの後ろ姿に言つと、レキがふいにこちらを振り返った。そして

「死ぬなよ」

冗談めかしたような声で言った。ただ、目は真剣だった。

「わかつてる」

春彦の返事を聞いて、ふっと笑った。

「じゃあな。またメールすっから」

「ああ」

レキがいなくなつてからもしばらく、春彦は店内でぼんやりとしていた。

明日は、姉のところに行く。これはもう、1年前から考えてたこ

とだ。

姉がおかしくなり始めたのは、俺が中学1年で姉が23歳の頃だった。少しずつ、笑顔に影が見えるようになっていった。だけど姉は何も言わなかった。疲れた笑顔で会社に出かけて、疲れた笑顔で帰って来た。

そのうち、姉は眠れないと訴えだして心療内科に通い始めた。軽度の鬱と不眠症だと診断され、いろんな薬を飲まされていた。あまりの薬の多さに不安になって、姉の飲んでる薬のことをこっそりと調べたこともある。

ある夜、姉が独りで泣いているのを見かけたこともあった。「どうしたの」と声をかけても「何でもないよ」としか返ってこなかった。泣きはらした目でこちらを見て、それでも笑った。日に日に弱っていく姉に、俺は何もできなかった。

姉はだんだんと、眠れない夜に独りごとを言うことが多くなっていった。

「ぐず」「役立たず」「のろま」「どじ」「辞めちまえ」

そこでようやく俺は、姉の勤めている会社に何か問題があるんじゃないかということに気付いた。会社から帰ってくるたびに目を腫らしている姉を、見ていられなかった。俺は父に電話して相談した。しかし返ってきた答えは

「忙しいんだ。自分たちでどうにかしろ」

これだけだった。

姉は会社を休みがちになった。家事は何とかこなすものの、普段はベッドの上にいることが多くなった。見かねた俺は、姉に言った。「会社、辞めなよ。生活費なら父さんがくれている分だけでも、どうにかやっていけるじゃないか」

姉は泣いていたが、ついに会社を辞める決意をした。会社を辞め

るために、退職願を出しに会社に出かけた。俺はついていくと言ったが、姉に「ハルだって今日は学校でしょ？一人で大丈夫だから」と言われて諦めた。今思えば、何と言われようがついていけばよかったと思う。だって、その帰り道で、姉は。

帰ってきた姉は泥だらけだった。

「どうしたの？」

と訊くと、泣き崩れた。そして呟き続けた。

「汚い。汚い。汚い」

帰り道、姉は犯された。会社のやつらとは無関係だった。

それから姉は、一步も外に出なくなつた。部屋の窓はすべて閉め切り、電気をつけようとしなかった。食事もまともに摂らず、みるみる痩せていく姉をなんとか救いだす方法を、必死になって考えた。レイプのことはどうしても通報したくないと姉は言い張った。

俺は何とか姉を励まそうと必死だった。学校帰りに綺麗なビー玉を買ってみたり、部屋に花を飾ったりした。姉は、綺麗なものが好きだった。そしていつも言った。

「だけど私は汚い」

それでも俺は、姉は綺麗だと思っていた。心から。

早朝の電車に揺られていると、携帯が震えた。レキからだった。

『今日はちゃんと早起きしたぜ！』

珍しく、絵文字付きだった。よかつたなどだけ返信する。それから頼杖をつけて、窓の外の景色を眺めた。どんどん都会からは離れて、海の方へと向かっている。海の近くにある、姉の墓へ。

この日のことは、去年のあの日から決めていたことだ。

姉が部屋に引きこもるようになってから、2年が経っていた。窓どころかカーテンも開けないこの部屋は、季節すらろくに分からないう。ただ、寒いので暖房器具をつけてあった。そう、季節は冬だった。

「姉さん」

声をかけると、痩せこけた姉が振り返った。そして少しだけ、笑った。

「ハル」

「姉さん、誕生日おめでとう」

その日は姉の誕生日だった。姉は一瞬複雑そうな顔をしてから、

「ありがとう」と言った。

「何か食べたい物とかない？プレゼントとか、さ」

姉はしばらく考えてから、首を横に振った。

「ないよ」

「…そっか。なんでもいいんだ。思いついたら言って」

春彦はベッドのそばにある机に置いてあったリンゴを手にとって、椅子に腰かけた。パーカーのポケットから果物ナイフを取り出して、リンゴの皮をむく。姉はしばらくその様子を眺めてから、小さな声で呟いた。

「…てほしい」

「え？」

皮をむく手を止めて、姉の方を見上げた。

姉は無表情だった。そして、カラカラに乾いた声で、言った。

「殺して、ほしい」

春彦の頭が真っ白になった。今、姉さんは何と言った？春彦はその言葉を、頭の中でもう一度繰り返そうとした。

「殺してほしい。死にたい」

春彦が頭の中で繰り返すのよりも早く、姉が呟く。先ほどよりも感情のこもった声だった。

「…やだよ」

やっと出てきた言葉は、たったこれだけ。でもこれを言うのが、その時の春彦にとっては精一杯だった。姉は春彦の言葉が聞こえてくるのかわからないのか、独り言のようにつぶやき続ける。

「花は綺麗。ガラスも。そのナイフも。ハルも。みんなみんな好き。だいすき。…だけど私は汚いから。もういらないの」

「そんなことない。そんな…」

春彦はリングとナイフを机に置くと、姉のもとに近寄り抱きしめた。それしか、自分にできることはなかった。

「だめだよ」

姉は力なく言った。

「汚いから。ハルが汚れちゃう」

「姉さん…」

春彦は泣いていた。その涙を見て、姉はほほ笑んだ。

「涙、綺麗。ハルも綺麗だよ。私は、私はね。いらないの」

「そんなことない。俺には姉さんが必要だよ」

「…ありがとう。でもね」

姉はほほ笑んだままだった。

「私は、私のことを必要としてない。いらないの」

その日から姉は、たびたび「死にたい」と言うようになった。春

彦は刃物や薬など、危険なものではできるだけ隠すようにした。姉が自殺してしまうのではないかという不安が、常に心のどこかにあった。

その日は終業式で、学校は午前中で終わりだった。家に帰ったらクリスマス準備をしよう、そして姉と二人で笑おう。冬休みは出来るだけ、姉のそばにいよう。そう思っていた。

買い物をしていたら、思った以上に時間がかかってしまった。帰宅した春彦は、真っ先に姉の部屋へと向かった。ノックしてドアを開けると、何かが足に当たった。それは、姉が瓶の中に入れて飾っていたはずのビー玉だった。足に当たったビー玉はころころと、ベッドの方へと転がっていく。

瓶が割れて床一面にビー玉の散らばっている部屋は、なぜかとても非現実に見えた。



電車を乗り継いで、ようやくたどり着いた霊園は、海が近くて景色が良かった。ここなら、姉も喜ぶだろうと思う。霊園のすぐそばにある花屋で献花を買っているとき、また携帯が震えた。今度はリナだった。

『ジェットコースター連続3回目!!今度はシオンも一緒に行こうね!!!』

動く絵文字付きで、ハートまで付いていた。春彦は適当な返事をして、携帯を閉じる。電源を切るうかとも考えたが、それはやめておく。

花と水を持って、姉の墓まで歩いた。坂を上っている最中にバランスを崩して、水が少し零れた。ズボンの裾が軽く濡れる。

「ズボン濡れちゃったよ、姉さん」

姉の墓の前で、苦笑しながら話しかけた。返事は、聞こえないけれど。

ビー玉の散らばった部屋で、姉はいつも通りベッドの上にいた。ただ、

その腹に、ガラスの破片が突き刺さっていた。

溢れ出ている血はどす黒く、姉が白い服を着ているせいか、妙に浮き出て見えた。

叫ぶことすら忘れて、その光景に目を見張った。何かの夢か、悪い冗談だと思った。そう思ったかった。

「……………」

姉のうめくような声が聞こえて、我に返った。姉は生きていた。だとしたら助かるかもしれない。なんとか働いた頭が、救急車を呼ぶように指示した。春彦は急いで電話をかけに行こうとした。当時春彦は、携帯を持っていなかった。

しかし、

「…ころ、して」

姉の声がはつきりと聞こえて、春彦は足をとめた。後ろを振り返る。姉は、春彦の方をまっすぐに見ていた。姉はもう一度口を開くと、

「殺して」

震える小さな声で、だが確実にそう言った。

「…姉さん」

春彦は無表情で、姉の方を見つめた。もういいんじゃないのか、という言葉が頭をよぎった。姉さんは十分頑張った。だからもう、いいんじゃないのか。

カーテンの隙間からわずかに夕日が差している。自分は、光にはなれなかった。いつか、自分ではなくてもどこかの誰かが、姉を助けてくれるんじゃないか。そんな夢物語を捨ててしまったのはいつだっただろうか。

ゆっくりと姉の方に近づく。床に散らばっていたビー玉がいくつか転がって、壁に当たる音が響いた。やせ細った姉は、それでも綺麗だった。姉は春彦の方を見るとほほ笑んだ。

「ハル、綺麗。好き」

小さく、かすれた声だった。きつと話すのもやつとなのだろう。

腹部に突き刺さったガラスを見ながら、春彦は嘔いた。

「…姉さんの方が綺麗だよ」

その言葉を聞いて、姉はひどく沈んだ顔をした。春彦の本心は、そして想いは、最後まで彼女には届かなかった。春彦はポケットからハンカチを取り出し、姉の腹に突き刺さっているガラスに巻いた。自分の手が、切れないように。

姉に突き刺さっているこのガラスの破片をひき抜けば、きつと出血量は増えるだろう。そして姉は死ぬだろう。そして俺は人殺しだ。今ならまだ間に合う。救急車を呼べば、まだ助かるかもしれないのに。なのに俺は、

「殺して」

再び繰り返した彼女の声はひどく小さく、かすれていた。

「もういい、喋らないで」

ベッドの上に横たわる姉を、春彦は右腕で強く抱きしめた。左腕で、ハンカチを巻いているガラスの破片を握る。春彦の首に、枯れ枝のように細い姉の腕が絡まって来た。その腕は、まだ温かい。春彦は眼を閉じた。そして、左腕に力を入れて姉に突き刺さっていたものを引き抜いた。

鈍い音。生ぬるい触感。姉がわずかにうめく声。春彦の首に蛇のように巻きついてた腕に一瞬だけ力が入り、直後ふつと抜けた。

「…好き」

うめくようなその声は、どちらが発したものは分からない。

光るガラスの破片と、ビー玉。滴り落ちる赤い血。そして透明の、  
涙。

空っぽになった姉のそばで、春彦は泣きながら考え続けた。俺も死ぬから。俺も、姉さんのそばに行くから。

姉の死は自殺として片づけられ、身内だけの葬儀はあつという間に終わった。父親はうんざりした顔で言った。

「なんでもっとちゃんと、あいつのことを見ておかなかったんだ」

春彦は父親をにらみ返した。お前に何が分かるんだ。何も、何も知らないくせに。

春彦は自分の部屋へ駆け込むと、引き出しから果物ナイフを取り出して、手首を深く切りつけた。鋭い痛みは歯を食いしばって耐え

ながら、呪文のように繰り返した。

「忘れないから。絶対に忘れないから。俺は、来年の姉さんの誕生日に死ぬ。それが俺からの、最後の誕生日プレゼントだよ。絶対に忘れない。この傷が、その証拠だから」

春彦のこの行動は自殺未遂として捉えられ、「実は春彦が姉を刺し殺したのではないか」という噂話まで流れるようになった。だが、春彦はそれを止めようとしなかった。自分が殺したようなものだと、思っていたから。

春彦は汲んできた水を使って墓を綺麗に掃除すると、買ってきた花を供えた。それから、

「これも」

ビー玉をいくつか、置いた。

「…誕生日おめでとう、姉さん」

春彦はほほ笑んだ。

「そっちの世界は、綺麗？」

風が吹いて、花が揺れた。それと同時に、携帯が震えた。今度はユウだった。

『お前が死んだら、誰が私にモヤシを分けてくれるんだ』

このメールには思わず笑ってしまった。ただ、ユウが言わんとしていることは春彦にもちゃんと伝わっていた。

「なあ、姉さん。なんでかな」

春彦は墓の横に立つと、まだ濡れている地面にそのまま座り込んだ。メールには返信せずにそのまま携帯を閉じて鞆にしまうと、代わりにナイフを取り出した。

「こんなに死にたいのにさ。なんで、他の奴が死ぬのはこんなに嫌なんだろうな」

死にたいと思っている人間が死ぬのは、ある意味本望だろう。それが本人にとつては一番幸せな終わらせ方かもしれない。それなのに「どうしても、死んでほしくないんだ。生きていくのがどれだけ辛いかわかってても。生き地獄見てくださって言うてるようなもんなのかもしれないけど。それでも」

身体を横に傾けて、こめかみを墓にこつんと当てた。ひんやりとした墓石は、死をそのまま表しているようだった。

「俺はさ、」

消え入りそうな声で囁いた。

「姉さんにも、死んでほしくなかったよ」  
そのまま声を押し殺して、泣いた。

日が沈み始めていた。寒さに身体を震わせてから、春彦はゆっくりと立ち上がった。ナイフを拾い上げて、それから墓の方を見る。

「姉さん俺、もうちょっと生きるよ」

その顔はかすかに笑っていて

「もうちょっと生きてみる。俺は…まだ死ねない」

決意した顔だった。

「まだそっちに行けない。俺は生きるよ」

その瞬間、強い向かい風が吹いた。供えていた花が揺れる。まるで、頷くように。

春彦は笑った。細めた眼から、透明な涙が一粒、零れおちた。

「ありがとう。美冬姉ちゃん」

そして僕らは

いつものラーメン屋に食べに行こうというメールが入ったのは、ちよつど乗り換えのために電車から降りた時だった。春彦は自宅の最寄り駅を通り過ぎて、学校の最寄り駅まで出た。ラーメン屋に入ると、いつもの3人は既に席に座っていた。リナが手をあげて「こつちこつち」と叫ぶ。

「そんなに叫ばなくても聞こえるよ」

この店そんなに広くないんだし、という言葉はぐつと飲み込んだ。

「おつそいわよ！お腹ぺこぺこなんだから！！」

リナが上半身を前後に揺らしながら言った。

「遊園地、楽しかったか？」

レキの隣に座りながら訊くと、3人とも顔が曇った。

「どうした？」

「そんなにおもしろくなかった」

と答えたのは、ユウだった。

「なんかあったのか？」

「いやなにも。ただ、…春に4人で行った時の方が面白かった」

「…そうか」

目の前に置かれたお冷を一口飲んでから、レキは言った。

「今度は絶対参加するだろ？シオンもさ」

3人がこちらを見た。その真剣さに、春彦は苦笑した。

「…ああ、もちろん。いつでも誘ってくれ」

「絶対だからね！」

「だから、死ぬなよ」

ユウがぼそりと呟いて、他の3人は一瞬固まった。そしてそのあと、皆で笑った。

「残念ながら、まだまだ死ぬ予定はないよ」

春彦は笑いながら答えた。それを聞いて、他の3人は安堵したよ

うな溜息をついた。

「…もしかしてばれてたのか？」

「なにが」

「俺が今日、どこに行って何をしようとしてたのか」

「知らないな。言いたいのか？」

春彦がかぶりを振ったのを見て、レキはほほ笑んだ。

「言いたくなったら言ってくれ」

「ねえ、注文しよ！私、モヤシラーメンとチャーハン！！」

「え？」

「んじゃー俺、そのセットにギョーザつけて！」

困惑する春彦をよそに、さっさと注文した二人はお冷を飲んでため息をついた。

「お前ら、そんなに食べられるのか？」

「もちろん。今日は奮発するんだよ！！」

春彦はユウの方を見た。ユウは澄ました顔で、窓の外を見ている。

春彦はメニュー表に目をやってから、大きく息を吸い込んだ。

「モヤシラーメン。あと、お子様茶碗ください」

それを聞いたユウが、静かにほほ笑んだ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1124t/>

---

死にたい僕ら

2011年5月10日10時25分発行